

SHIMO - MINOGAYA SITE

# 下箕ヶ谷遺跡

長野京急カントリークラブ建設事業にともなう  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月

長野市教育委員会

# 序

平成5年3月、「高速道路」長野自動車道・上信越自動車道の開通は長野市にとって高速交通網社会の到来を感じさせる出来事でありました。また1998年長野冬季オリンピックは来シーズンと押し迫り、開催に向けての施設建設や従来停滞していた道路整備などともなう工事もほぼ終了し、長野市の景観も大きく変わりつつあります。しかしながら生活の向上を求める陰に地中に埋もれている貴重な歴史、埋蔵文化財がこれら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

本書に所収しております下箕ヶ谷遺跡は、長野市北部に扇状地を形成した浅川の上流、飯綱山の裾野に広がる飯綱高原に立地しています。来シーズンの長野冬季オリンピックではフリースタイルスキー会場となる、長野市有数の観光地でもあります。ゴルフ場造成工事という大規模事業に先立ち、造成予定地全域にわたる詳細な分布調査と綿密な保護協議を実施し、多くの遺跡を壊すことなく現状保存し、必要最低限の発掘調査を実施しました。長野市の埋蔵文化財第83集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました京浜急行電鉄株式会社の皆様、工事を請け負われた鹿島建設株式会社の関係諸氏、発掘作業に携わっていただきました地元発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成9年3月

長野市教育委員会  
教育長 滝澤 忠男

# 例 言

- 1 本書は、民間開発事業「長野京急カントリークラブ建設事業」にともない、平成7年度に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、委託者 京浜急行電鉄株式会社 取締役社長 平松 一郎 と受託者 長野市長 塚田 佐との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）が実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野県長野市大字北郷2016-6番地 他5籍にわたり、開発事業総面積154haのうち、保護対象面積を5,000㎡とし、実質調査面積は4,730㎡である。
- 4 発掘調査現場は、矢口の指導のもと飯島が担当し、小野が補助した。
- 5 本書の編集は矢口・飯島の指導のもと小野が担当した。整理作業は各調査員が分担しこれを補助した。執筆分担は下記のとおりである。

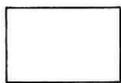
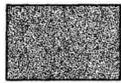
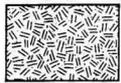
小野由美子 第四章  
飯島 哲也 上記以外。なお第三章は各調査年度の試掘概要報告書による。
- 6 発掘調査の実施に際し、事業委託者である京浜急行電鉄株式会社取締役社長平松一郎氏におかれては埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき、絶大なご協力を賜った。特に平成7年度実施の発掘調査において、表土掘削用の重機は委託者からの提供を受けた。また、現場における調査及び本書作成にあたっては下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し銘記するものである。

京浜急行電鉄株式会社 長野事務所 鈴木征治、大川幸治、宮坂 岳  
鹿島・大林・東急・建設共同企業体 長野京急C.C.J V工事事務所 前田信久  
長野市浅川地区北郷区長、中曾根区長、台ヶ窪区長、伺去区長、真光寺区長、浅川東条区長  
信濃町教育委員会・信濃町立野尻湖博物館 学芸員 中村由克
- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。  
なお、出土遺物の注記記号は「SMKC」と表記してある。

# 凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 調査成果は、第三章試掘調査と第四章発掘調査に分けて記述してある。
- 2 地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。なお調査地付近における座標北の真北方向角は約 $0^{\circ}11'38''$ であり、また磁北は真北より西へ約 $6^{\circ}40'$ の偏差がある。
- 3 遺構の測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経 $138^{\circ}30'00''$ 、北緯 $36^{\circ}00'00''$ ）からの座標値と、日本水準原点の標高を基準とし、(有)写真測図研究所の開発したコーディックシステムを援用するため同所に委託した。  
現場にて $1/20$ の縮尺で基本現図を作成し、本書では基本的に $1/40$ の縮尺で掲載している。ただし遺物出土状況微細図などの詳細図に関してはこの限りではないため、縮尺を明示してある。
- 4 検出した遺構の略記号については、奈良国立文化財研究所作成の記号をもとに、本遺跡に対応させて仮に下記のとおり作成した。  
S B…居住施設、S N…集石遺構、S K…土坑、S D…溝跡、S H…柵状遺構、S P…小穴、  
S X…性格不明遺構、T r…トレンチ
- 5 遺物に関しては原寸にて実測図を作成し、基本的に土器実測図 $1/4$ 、土器拓影 $1/3$ 、石器 $1/1$ などに統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を明示してある。
- 6 遺構分布図、居住施設などの遺構実測図において、集石・焼土の範囲などの区別は、下記のとおり網掛けによって表記した。また土器などの遺物実測図においては、土器の種類や黒色処理なども同様に表記した。

	… 縄文・弥生土器 土 師 器		… 須 恵 器 赤色塗彩の範囲		… 焼土の範囲 灰釉陶器
	… 陶 磁 器 類		… 内黒処理の範囲		… 炭化物の範囲

# 目 次

序文、例言、凡例、目次	
第Ⅰ章 調査経過	(飯島) … 1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	3
第Ⅱ章 下箕ヶ谷遺跡周辺の環境	(飯島) … 4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	7
第Ⅲ章 試掘調査	(飯島) … 10
第1節 計画地と遺跡の分布	10
第2節 昭和63年度の調査	11
(1) A、A'地点(さかさやち遺跡)	11
(2) B地点(下箕ヶ谷遺跡)	14
(3) C地点(上箕ヶ谷遺跡)	15
(4) D・E地点	15
第3節 平成7年度の調査	16
第Ⅳ章 発掘調査	(小野) … 17
第1節 調査区の位置と概要	17
第2節 調査日誌抄	24
第3節 基本層序	25
第4節 遺構と遺物	26
(1) 居住施設	26
(2) 集石遺構	31
(3) 土坑	34
(4) 溝跡・柵状遺構	35
(5) その他の遺構と遺物	36
第Ⅴ章 結 語	(飯島) … 38

報告書抄録、奥付

## 挿 図 目 次

第1図	下箕ヶ谷遺跡周辺地形図	5
第2図	飯綱高原表層地質図	6
第3図	下箕ヶ谷遺跡周辺遺跡分布図	8
第4図	飯綱高原の開発による変遷	9
第5図	開発予定地内の試掘調査箇所と 近隣遺跡	10
第6図	A地点試掘箇所位置図	11
第7図	A地点(No1～5)土層柱状図	12
第8図	土坑a実測図	12
第9図	土坑b実測図	13
第10図	土坑c実測図	13
第11図	土坑d実測図	13
第12図	B地点出土土器実測図	14
第13図	B地点出土石鏃実測図	14
第14図	B地点試掘箇所位置図	14
第15図	C地点出土土器実測図	15
第16図	C地点試掘箇所位置図	15
第17図	第6トレンチ出土土器実測図	16
第18図	平成7年度下箕ヶ谷遺跡試掘箇所 位置図	16
第19図	下箕ヶ谷遺跡発掘調査地点位置図	17
第20図	調査区配置および遺構全体図	19
第21図	A遺構分布図	21
第22図	B区遺構分布図	23
第23図	第7トレンチ土層柱状図	25
第24図	A区SB1実測図	26
第25図	SB1遺物実測図	27
第26図	B区SB2実測図	28
第27図	SB2遺物実測図	30
第28図	B区SN1実測図	31
第29図	SN2出土土器実測図	32
第30図	SN2実測図	33
第31図	SK1出土土器実測図	34
第32図	A区SK1実測図	34
第33図	SD1・SH1実測図	35
第34図	SD1出土土器実測図	35
第35図	A区出土縄文土器実測図拓影	36

## 写 真 目 次

写真1	大池より飯縄山を望む	1
写真2	平成7年度発掘調査参加者 (背景は飯縄山)	3
写真3	下箕ヶ谷遺跡航空写真	4
写真4	A地点の調査トレンチ	10
写真5	長方形土坑a検出状況	11
写真6	長方形土坑a掘削状況	11
写真7	土坑a完掘	12
写真8	土坑b完掘	13
写真9	土坑c完掘	13
写真10	土坑d完掘	13
写真11	B地点出土石鏃	14
写真12	A区全景(東から)	18
写真13	B区全景(東から)	18
写真14	B区重機表土剥ぎ作業	24
写真15	B区遺構検出作業	24
写真16	B区SD1掘下げ作業	24
写真17	B区SN1実測作業	24
写真18	第7トレンチ土層堆積状況	25
写真19	A区西北隅北壁土層	25
写真20	A区SB1(北から)	27
写真21	A区SB1(西から)	27
写真22	SB1出土土器	27
写真23	B区SB2(北から)	28
写真24	B区SB2遺物検出状況	29
写真25	B区SB2遺物検出近景	29
写真26	SB2出土土器	29
写真27	SN1(北から)	32
写真28	SN2中心部(北から)	32
写真29	SN2(東から)	33
写真30	SN2(北から)	33
写真31	SK1完掘	34
写真32	SD1・SH1(北から)	35
写真33	SD1・SH1(西から)	35
写真34	A区出土縄文土器	36
写真35	下箕ヶ谷遺跡出土土器	36
写真36	風倒木痕半割状況	37
写真37	風倒木痕土層断面	37
写真38	B区東半遺構全景	37
写真39	A区風景	37
写真40	B区風景	37
写真41	飯縄山頂からみた下箕ヶ谷遺跡	38

# 第 I 章 調査経過

## 第 1 節 調査に至る経過

下箕ヶ谷遺跡の所在する飯綱高原一帯は、長野市域においてもっとも埋蔵文化財包蔵状況の不明な地点の一つである。旧石器時代の上ヶ屋遺跡など、遺物の表面採集ポイントが点的に散在するのみで、遺跡の広がりをも面的に把握するには至っていない。事業主体である委託者よりゴルフ場開発にともなう埋蔵文化財の分布状況についての問い合わせがあったのは昭和62年度に遡る。昭和63年3月29日付けで市教育長あて埋蔵文化財分布調査の依頼があり、同年4月26日現地踏査を実施した。その結果、開発予定区域内の埋蔵文化財の包蔵が予想されるA～E、A'地点の6箇所について、試掘調査が必要な旨を5月2日付けで回答した。同月24日付けで分布調査の委託契約を締結し、A～D地点を24～26、30・31日の5日間試掘調査を実施した。A地点（さかさやち遺跡）では縄文時代の土坑群を、B（下箕ヶ谷遺跡）・C（上箕ヶ谷遺跡）地点では縄文時代と古代の遺物など良好な埋蔵文化財の包蔵を確認した。A'、D地点は埋蔵文化財の包蔵はなかった。E地点についても地権者の同意が得られた平成3年5月8日に補足の試掘調査を実施したが、埋蔵文化財の包蔵は確認できなかった。これら試掘調査の結果から、A～Cの3地点については埋蔵文化財保護措置が必要となり、現状保存のため造成範囲から除外されるよう設計変更を依頼した。事業主体者の深いご理解と絶大なご協力により埋蔵文化財保護を目的とした設計変更がなされ、B地点以外については現状保存することができた。B地点（下箕ヶ谷遺跡）については、造成計画のD調整池予定地にあたり治水計画上現状保存が困難であり、平成7年度に記録保存を目的とした発掘調査を実施することになったのである。



写真1 大池より飯縄山を望む

## 第2節 調査体制

本調査は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）の直轄事業として実施し、その組織は以下のとおりである。

### 昭和63年度〔試掘調査〕

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	奥村 秀雄		
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	諏訪部和彦		
		所長補佐	小山 正		
庶務係	（係長	小山 正）			
	事務員	青木 厚子			
調査係	係長	矢口 忠良（総括担当者）	専門主事	小松 安和（調査員）	
	主事	青木 和明（調査主任）	専門主事	中沢 克己（調査員）	
	主事	千野 浩	専門主事	大室 昂（調査員）	
			専門員	中殿 章子	
			専門員	横山 かよ子	
調査協力者	信濃町教育委員会・信濃町立野尻湖博物館学芸員		中村 由克		

### 平成3年度〔試掘調査〕

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	奥村 秀雄		
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	小山 正		
		所長補佐	山中 武徳		
庶務係	（係長	山中 武徳）			
	事務員	青木 厚子			
調査係	係長	矢口 忠良（総括担当者）	専門主事	小松 安和	
	主事	青木 和明（調査主任）	専門主事	羽場 卓雄	
	主事	千野 浩	専門主事	太田 重成	
	主事	飯島 哲也	専門員	中殿 章子	
			専門員	横山 かよ子（調査員）	
			専門員	森泉 かよ子	

### 平成7・8年度〔発掘・整理調査〕

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤 忠男		
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	丸田 修三		
		所長補佐	小林 重夫		
		所長補佐	矢口 忠良		

庶務係	(係長 小林 重夫)		
	事務員 青木 厚子		
調査係	(係長 矢口 忠良、総括担当者)	専門員	中殿 章子
	主査 青木 和明	専門員	山田 美弥子
	主査 千野 浩 (H8～)	専門員	寺島 孝典 (～H7)
	主事 千野 浩 (～H7)	専門員	西澤 真弓
	主事 飯島 哲也 (調査主任)	専門員	小野 由美子 (調査員)
	主事 風間 栄一	専門員	永井 洋一 (～H7)
	主事 小林 和子	専門員	堀内 健次
	専門主事 清水 武	専門員	藤田 隆之
		専門員	勝田 智紀 (H8～)
		専門員	宮川 明美 (H8～)
		専門員	小林 まゆ佳 (H8～)

調査員 矢口栄子、青木善子

発掘参加者 岩崎寛治郎、鎌田久良、神頭幸雄、小林紀代美、鈴木友江、鶴田倫子、中村忠彦、  
松木規恵、美谷島昇

整理参加者 岡沢治子、倉島敬子、多羅澤美恵子、塚田容子、徳成奈於子、西尾千枝、松澤ナオエ、  
向山純子

石材鑑定 長野市立博物館茶臼山自然史館 学芸員 畠山 幸司

遺構測量委託 有限会社写真測図研究所 代表取締役 杉本 幸治



写真2 平成7年度発掘調査参加者 (背後は飯縄山)

## 第Ⅱ章 下箕ヶ谷遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

長野市の最高地点、飯縄山（標高1917.4m）は妙高火山群に属し、洪新世中期から後期に基盤の新第三系の上に噴出してできた溶岩円頂丘をもつ複式成層火山である。直径約2.2kmの馬蹄形のカルデラが北西の戸隠村に開いており、内部に瑠璃山（1748m）、怪無山（1549m）、高デッキ、天狗岳などの中央火口丘があり、北西および南西山腹に中ノ峰、笠山、富士見山、大頭山などの側火山がある。主峰とその北方の霊仙寺山が外輪山をなし、その南麓を飯綱原、東麓を東飯綱原といい、あわせて飯綱高原と呼ばれている。

上信越高原国立公園の拡張区域となる飯綱高原は、長野市街地から車で30分という近さも手伝って、年間約90万人が訪れる観光地となっている。春の新緑やミズバショウ、夏の避暑、秋の紅葉、冬のスキーと観光資源に恵まれ、また来シーズン1998年2月には長野冬季オリンピックが開催され、飯綱高原はフリースタイルスキーとボブスレー・リュージュの競技会場となる予定で、熱戦が期待されている。

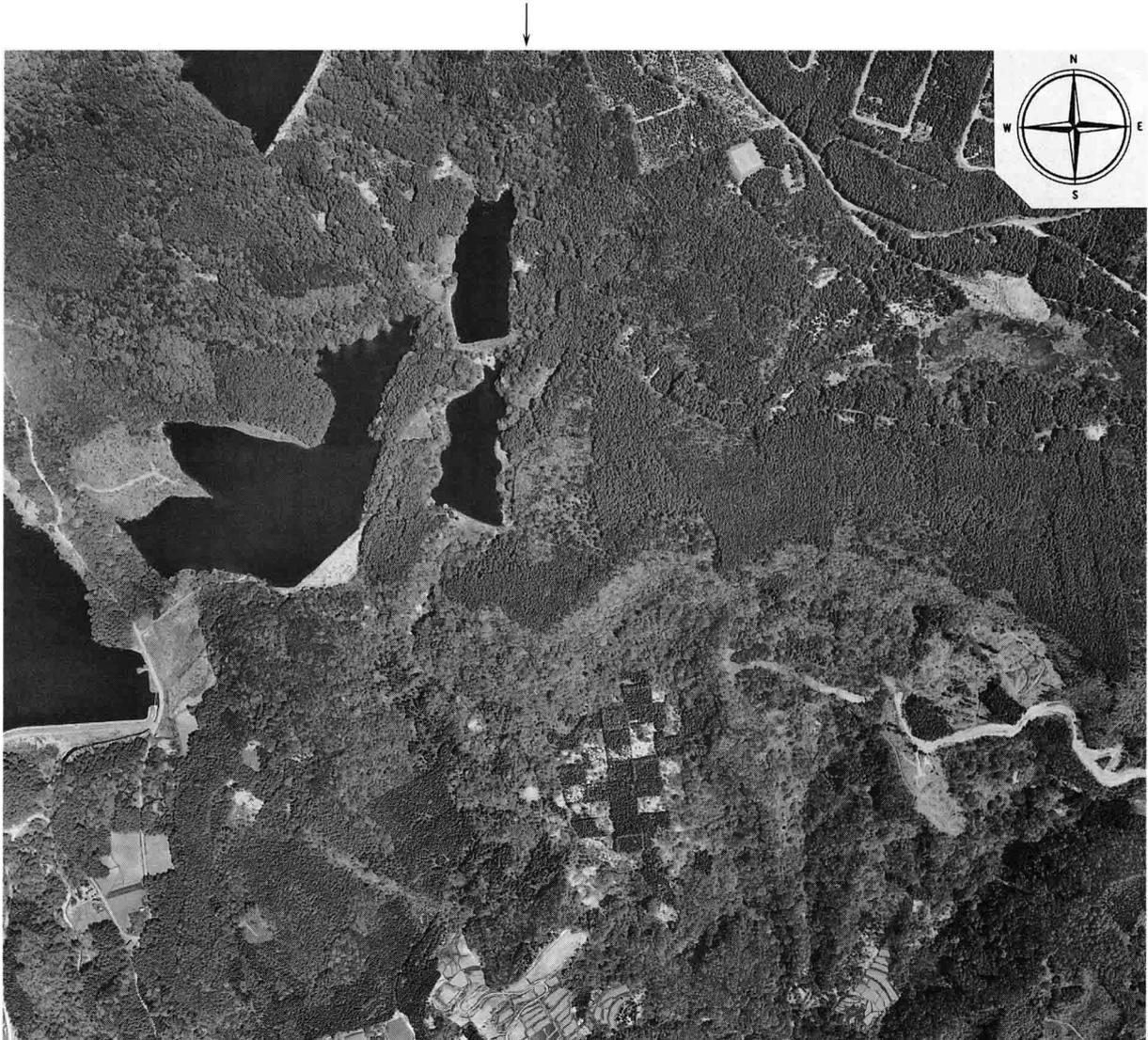
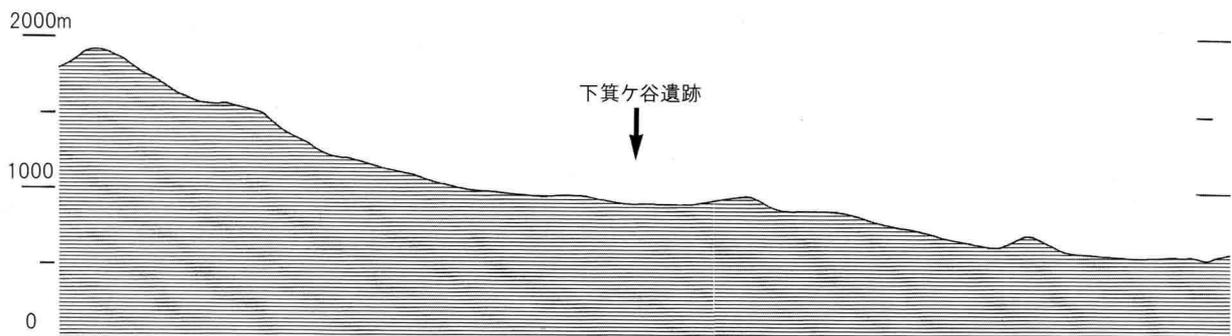
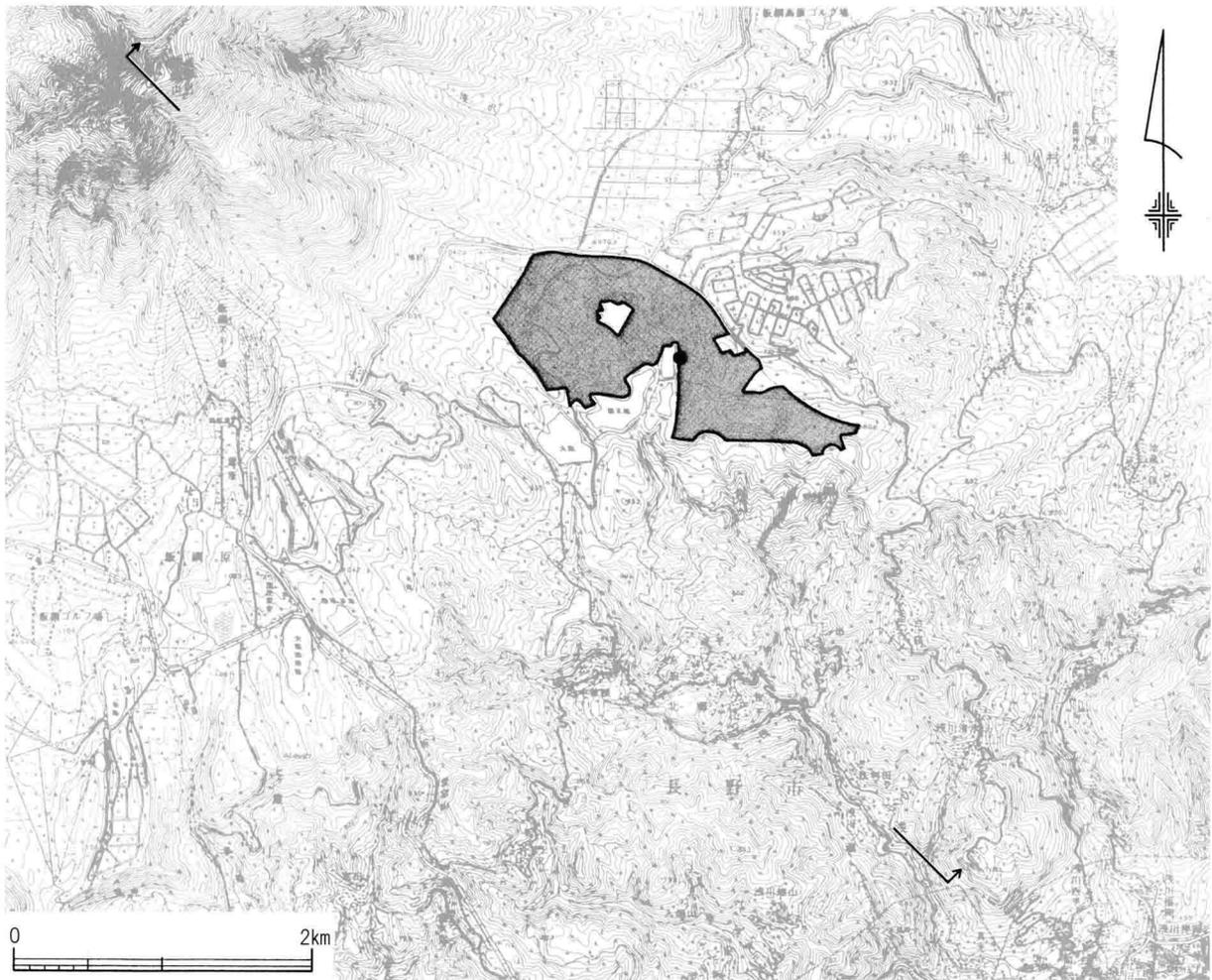
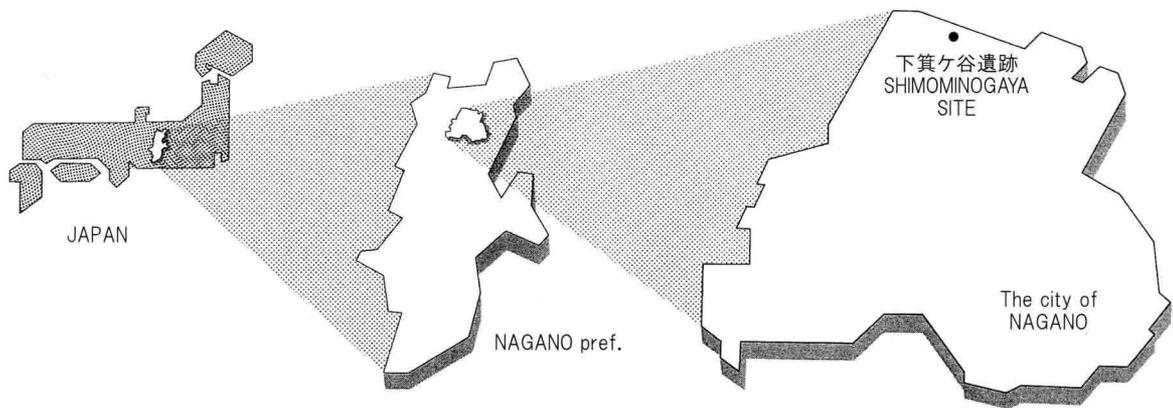


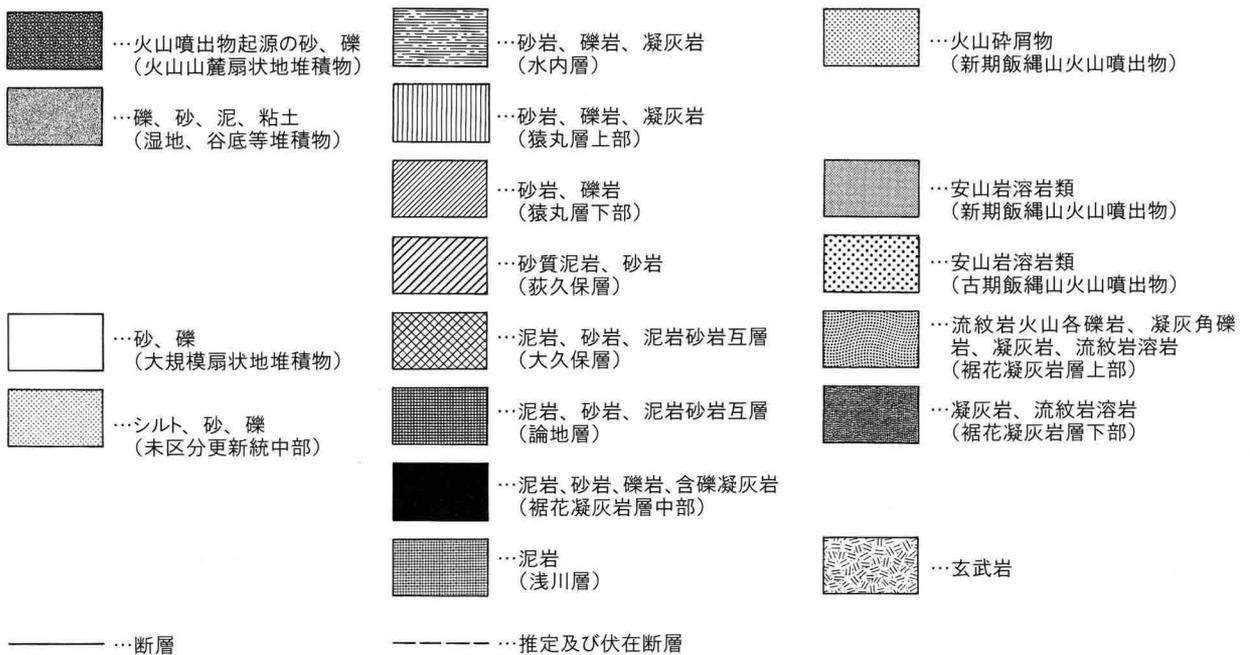
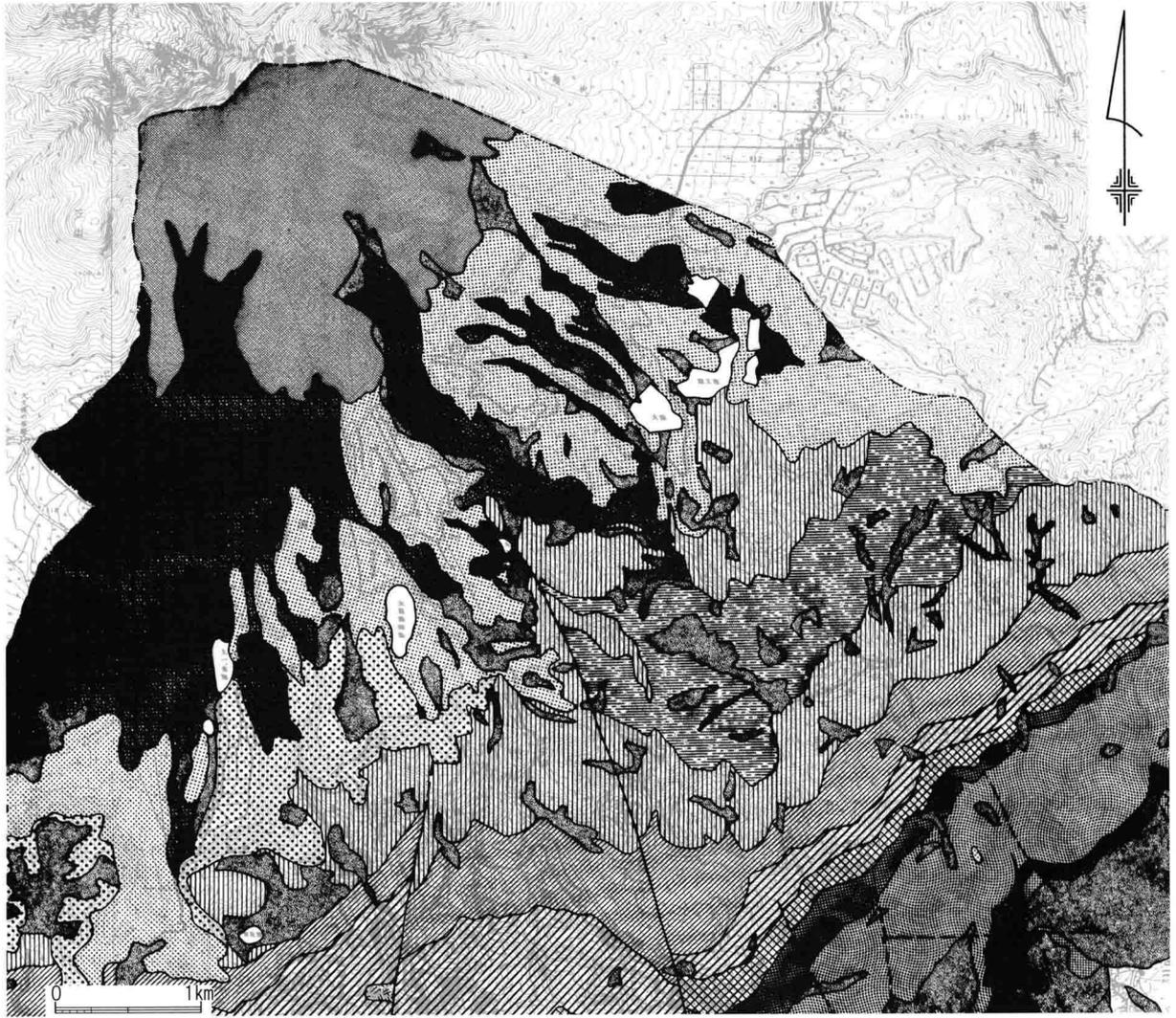
写真3 下箕ヶ谷遺跡航空写真

「この写真は、長野市長の承認を得て長野市道路基本台帳空中写真を複製したものである。

承認番号平成8年11月27日8監第18-11号」



第1図 下箕ヶ谷遺跡周辺地形図 (S= 1 / 50,000、網掛け範囲は開発工事区域)



第2図 飯綱高原表層地質図 (S=1/50,000)

下箕ヶ谷遺跡の位置する飯綱高原は、長野市街地の北西約9km、標高900～1,100mの緩やかな起伏をもつ高原状の地形である。構成する土壌は、火砕流堆積物と、それを覆う火山麓扇状地堆積物である。ここには大座法師池をはじめ猫又池、大池、上一ノ倉池（飯綱湖）など多数の池や、大谷地（おおやち）、逆谷地（さかさやち）などの湿原が飯綱山を取り巻くように点在し、泥炭層を含む新期の湖沼堆積物が分布している。2,000㎡以上の面積をもつものが11池沼あり、合計面積は381,508㎡と地区全体面積2,150haの1.8%にあたり、池沼の多い高原といえる。

起因事業の予定地内には逆谷地湿原がある。飯綱高原の東端に位置し、集水域を南東にもち西方向に流水する約4.5haの高層湿原である。湿原中央部で行なわれたボーリング調査により12.35mの厚さの湖沼堆積物が確認され、地表下約120cmには約2.5万年前に九州鹿児島島の始良カルデラから噴出した始良丹沢火山灰（AT）が堆積していた。また地表下約210cmの泥炭層の14C年代測定（米国テレデザイン社測定）では、27,650年±1,100年BPの結果が得られている。泥炭層の花粉分析ではI～VI帯の花粉帯に区分され、I帯が最終氷期の始め、II帯は約6～5万年前の最終氷期初葉、IV帯は約2万年前の最終氷期の最寒冷期、V帯は温暖な気候の縄文時代前期～中期、VI帯はソバ属やマツ属の出現から平安時代以降にあたる。これらのデータから逆谷地湿原は、約7万年前から現在まで谷状地形を埋めるように発達した長期間の湿原堆積物からなり、日本でも有数の貴重な湿原であることが判明した。

## 第2節 歴史的環境

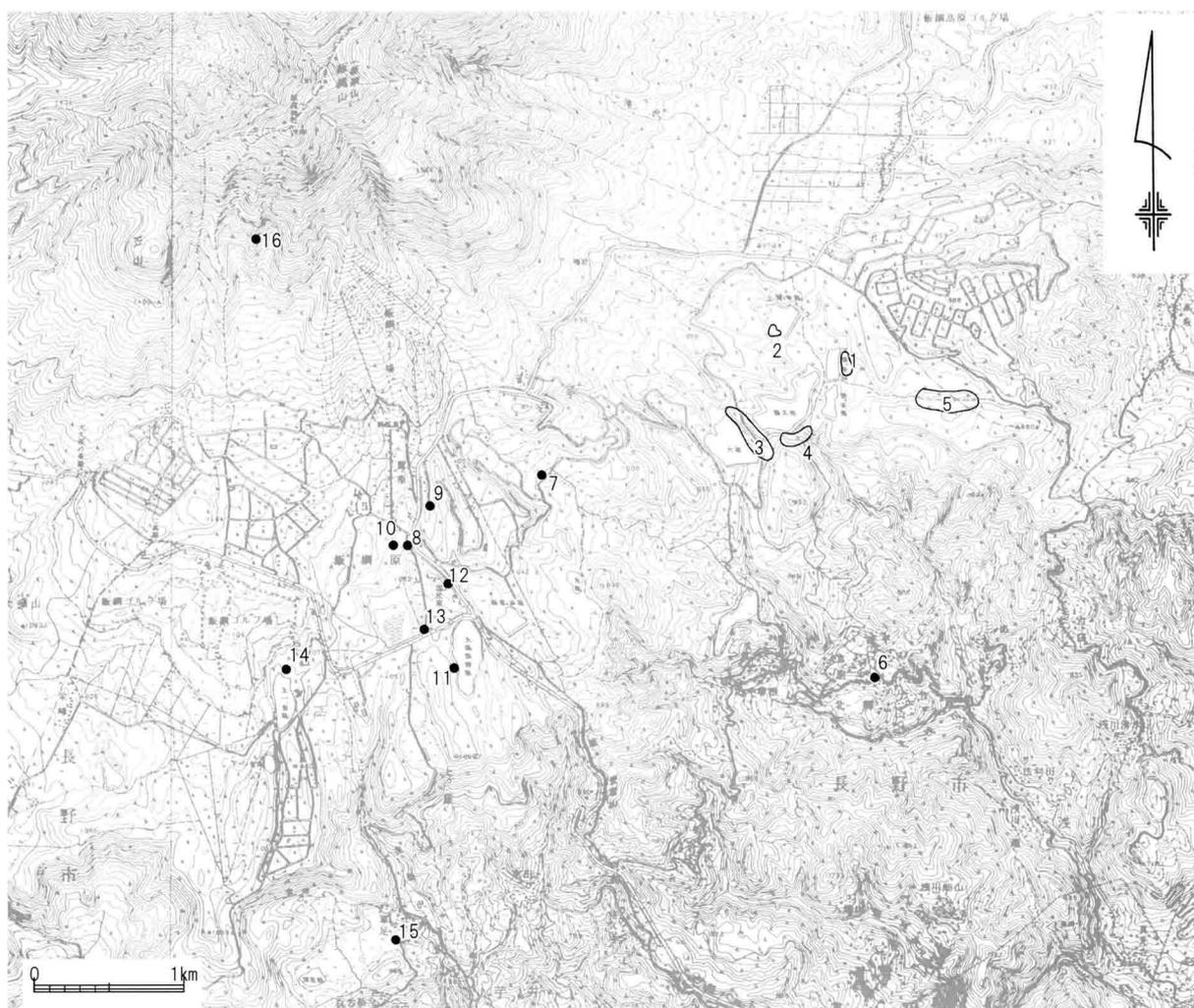
飯綱高原では各所で遺物を表面採集することができる。特に大池や猫又池など池沼の畔で多く採集されるが、縄文時代の土器片や石器、平安時代の土器片がほとんどである。これらの採集地点は点在しており、飯綱高原全体での遺跡範囲など、詳細はまったくわかっていないのが現状である。

大谷地湿原の東側にある上ヶ屋遺跡は、1960（昭和35）年に森嶋稔によって発見された後期旧石器時代後半期の遺跡である。1961（昭和36）年に第1次調査、1972（昭和47）年に第2次調査が実施され、また近年長野市誌編さん事業にともなう現地踏査や分布調査が行われている。長野市域における旧石器時代遺跡の発掘調査例としては唯一である。上ヶ屋遺跡からは、石器や石片が集中するブロックと焼けた河原石が集中する礫群が確認され、発見された主要な石器には、ナイフ形石器、尖頭器、搔器、彫刻器、削器、揉錐器などがある。ナイフ形石器の製作技法には、関東に分布の中心をもつ茂呂型、東北地方に分布の中心をもつ杉久保型、近畿地方に分布の中心をもつ国府型がみられ、広域にわたる地域交流をも想定できる点が上ヶ屋遺跡の特徴である。旧石器時代遺跡の異常な集中を示す野尻湖周辺から、飯綱山をはさんで南西約15kmに位置していることから、上ヶ屋遺跡以外に飯綱高原に未知の遺跡がある可能性は高い。

奈良時代になると山岳信仰が日本全国に広がり、飯綱山もコニーデ火山の独立峰の美しさから、山岳信仰の霊場として飯綱信仰が発祥したと伝えられている（役小角入山伝説）。平安時代には、849（嘉祥2）年ごろに学問行者が入山し、その後天狗思想や稲荷思想、ダキニ天思想が混合され飯綱信仰の基礎ができたといわれている。鎌倉時代には1233（天福元）年水内郡萩野の地頭、伊藤兵部大夫豊前守忠綱が入山し、厳しい修業の末ダキニ天の法を会得したらしい。室町時代の1369（応安2）年には足利義満が、將軍継承の無事を祈願して「飯綱山地蔵菩薩像」を寄進している。その後忠綱の嗣子の次郎大夫盛綱も入山し、術を受け継ぎ「千日太夫」と名乗り、飯綱の法の始祖となり、以後その子孫が千日太夫の名と法を世襲したとある。戦国時代には武田晴信（信玄）が1557（弘治3）年に千日太夫あて知行安堵状を送り、1567（永禄10）年に長刀を寄進、1570（元亀元）年旧領のほか新領を寄進するなど飯綱信仰に熱心であったことが知られている。江戸時代の1604（慶長9）年には徳川家康

からの安堵状や、松代藩に飯綱の法が相伝されるなど武術のうえにも少なからず影響を与え、飯綱信仰は隆盛を誇った。しかし明治時代になると武家社会の終わりとともに衰退し、日本全国にある飯綱神社の本山であるにもかかわらず、地元や一部の人々が信仰するのみとなっている。飯縄山登山道の途中、駒つなぎ付近の標高1,500 mあたりに千日太夫屋敷跡（市子屋敷・長者屋敷）があり、1982（昭和57）年と翌年に飯綱総合学術調査の一環として発掘調査が実施され、石積み遺構などが検出されている。

飯綱高原には多くの池沼があるが、これらはもともと火山灰土層の表面の浅い凹地や湿地であったところに、中世に堰堤など何らかの人工が加えられ、用水溜池として利用されるようになったものである。それ以前から飯綱高原は水源地として重要であったが、通常は水量の少ない浅川が、大雨が降ると氾濫するので、その治水的機能も含まれていたであろう。1563（永禄6）年に大池、1567（永禄10）年に丸池が造成され、1656（明暦2）年に上箕ヶ谷池、1686（貞享3）年に下箕ヶ谷池、1759（宝暦9）年に論電ヶ谷池が築造された。1939（昭和14）年、大雨により論電ヶ谷池が決壊して鉄砲水が発生し、死者19人をだす惨事があった。その後猫又池が築造されるが、1984（昭和59）年に論電ヶ谷池が埋め立てられグラウンドが造成された。これらの溜池は水源地の沼地帯だっ



第3図 下箕ヶ谷遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

- |           |           |             |              |
|-----------|-----------|-------------|--------------|
| 1 下箕ヶ谷遺跡  | 5 さかさやち遺跡 | 9 芋井麓原B遺跡   | 13 上ヶ屋遺跡     |
| 2 上箕ヶ谷遺跡  | 6 親ヶ峰遺跡   | 10 長者屋敷遺跡   | 14 一の倉遺跡     |
| 3 飯縄大池遺跡  | 7 大平遺跡    | 11 大座法師池A遺跡 | 15 軍足遺跡      |
| 4 飯縄猫又池遺跡 | 8 芋井麓原A遺跡 | 12 大座法師池B遺跡 | 16 飯縄千日太夫屋敷跡 |

た部分を拡張し、出水口を堰き止めて造られたものが多い。

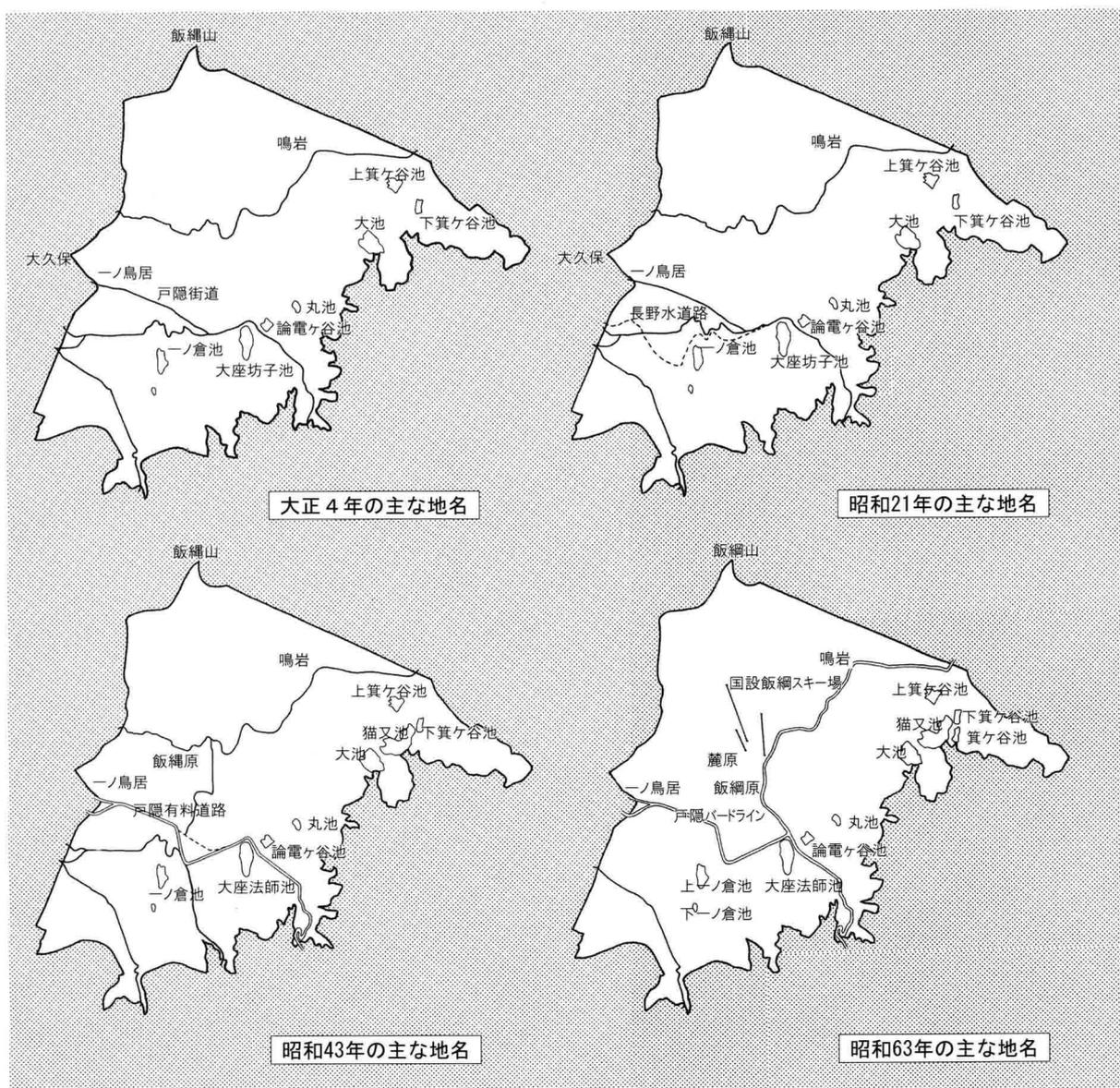
飯綱高原に人が住みはじめたのは、1914(大正3)年飯綱鉱泉に戸隠参拝や荷役往來の宿泊所が開設されたのが始まりとされ、昭和10年代に4軒の開拓者が移住し、戦前には5軒が居住していた。近年の飯綱高原は、1964(昭和39)年に長野県企業局によるバードラインの開通後観光地化が進み、昭和40年代の別荘地の開発や、スキー場・ゴルフ場・キャンプ場などのスポーツ・レクリエーション施設の建設など、リゾート地として発展してきている。また、浅川ループラインの開通により交通の便も向上し、長野市街地から車で30分という立地条件から民間の宅地分譲も進んでおり、定住者は年々増加してきている。

### 参考文献

長野県史刊行会 1982 『長野県史』考古資料編 全1巻 東・北信

長野市誌編さん委員会 1997 『長野市誌』第1巻 自然編 長野市

長野市飯綱高原自然復元基本調査委員会 1993 『長野市飯綱高原の豊かな自然復元基本調査報告書』長野市



第4図 飯綱高原の開発による変遷

### 第三章 試掘調査

#### 第1節 計画地と遺跡の分布

調査の起因となる民間開発事業、長野京急カントリークラブ建設事業は、長野市と牟礼村にまたがる154haものゴルフ場造成である。隣接地には遺物散布地である周知の埋蔵文化財包蔵地、飯縄大池遺跡や飯縄猫又池遺跡があり、予定地内も埋蔵文化財の包蔵の可能性はきわめて高いものと推測できた。昭和63年3月29日付けで委託者より提出された分布調査の依頼を受け、同年4月26日、飯綱高原で遺物の表面採集される可能性が高い池沼まわりを中心に、開発予定区域内をくまなく現地踏査した。現状地形や地表面での遺物表出状況から、埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられるA～E、A'の6地点を選定した。A'、A～Dの5地点は昭和63年度に試掘調査を実施し、地権者の同意が遅れたE地点は平成3年度に実施した。また平成7年度には、発掘調査が必要となったB地点について、遺構確認を目的とした試掘調査を本調査前に実施した。



写真4 A地点のトレンチ調査



第5図 開発予定地内の試掘調査箇所と近隣遺跡 (S = 1 / 25,000)

- 1 飯縄大池遺跡      2 飯縄猫又池遺跡

## 第2節 昭和63年度の調査

### (1) A地点（さかさやち遺跡）

昭和63年5月24～26日の3日間、逆谷地湿原の南縁平坦部に幅約1m、総延長約400mの布掘りトレンチを設定し、小型バックホーを用いて掘削した。トレンチ内の土層堆積は、地表より50～60cmの深さまで黒色火山灰土が堆積し、それ以下が黄褐色系の火山灰土（ローム）層である。検出した遺構は、長方形土坑10基であり、うちa～dの4基については覆土を掘下げ、埋没状態を明らかにしたが、その他は検出面での確認にとどまる。上面での平面形は、幅約1mの長方形の他にやや大きめの不整形なものがある。長方形の土坑には底面に小穴を穿ったものが認められ、縄文時代早期の落とし穴遺構として報告されているものとの形態的な共通点が多い。これらは黒色土中から掘り込まれ1m以上の深さをもつが、遺物の出土はみられなかった。同様な遺構は近隣の飯縄大池遺跡においても確認されており、狩猟場としての好適条件を満たす湿原地帯周辺に広く分布するものであろう。

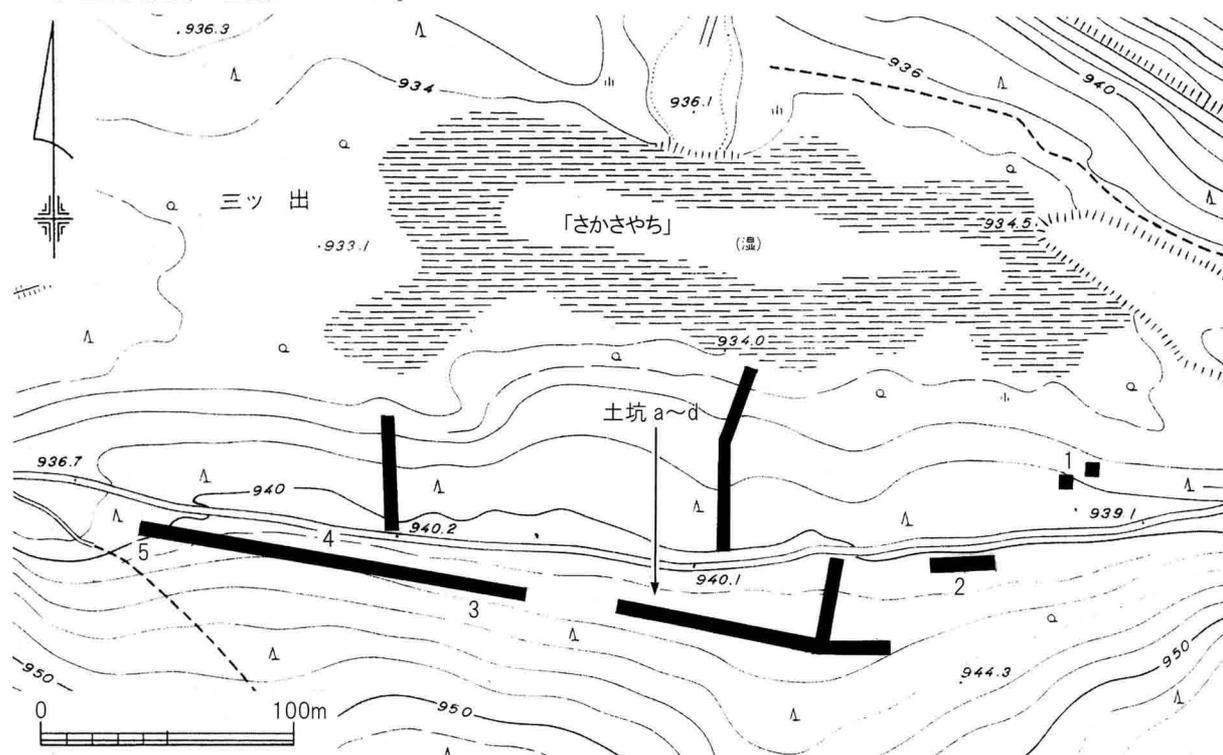
また、逆谷地湿原の対岸となる北西の小尾根頂部において、A'地点として11ヶ所の坪掘りトレンチを設定したが、埋蔵文化財の包蔵はなかった。



写真5 長方形土坑群検出状況



写真6 長方形土坑群掘削状況



第6図 A地点試掘箇所位置図 (S=1/3,000)

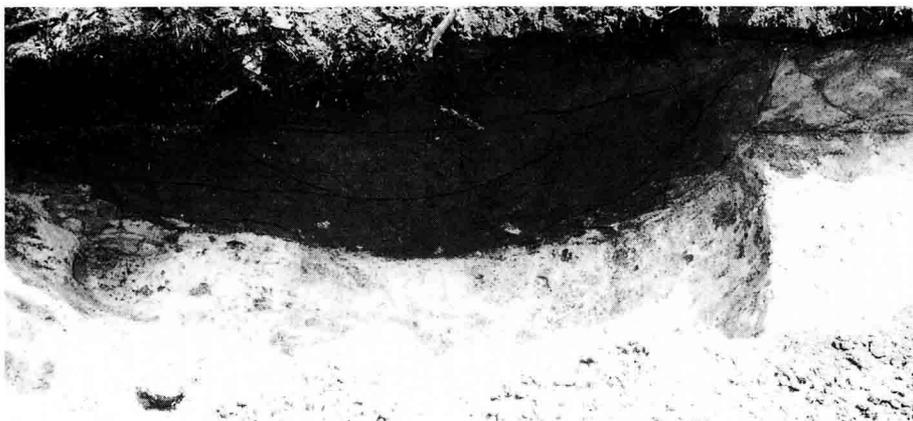
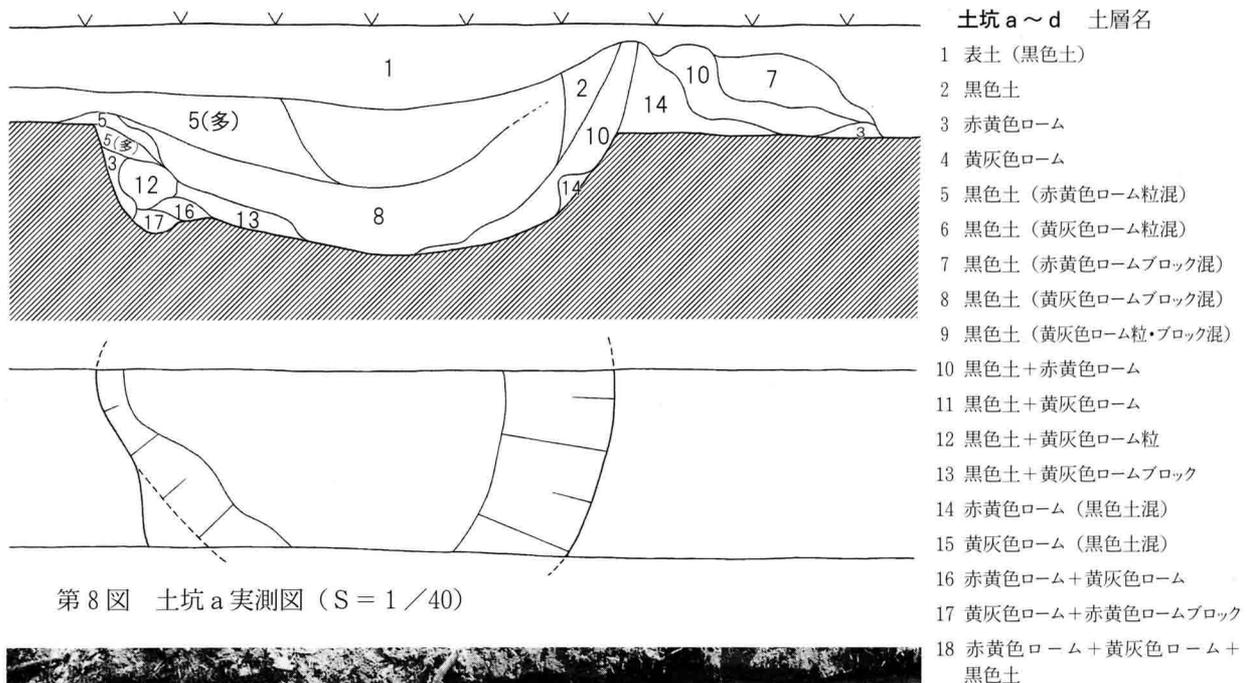
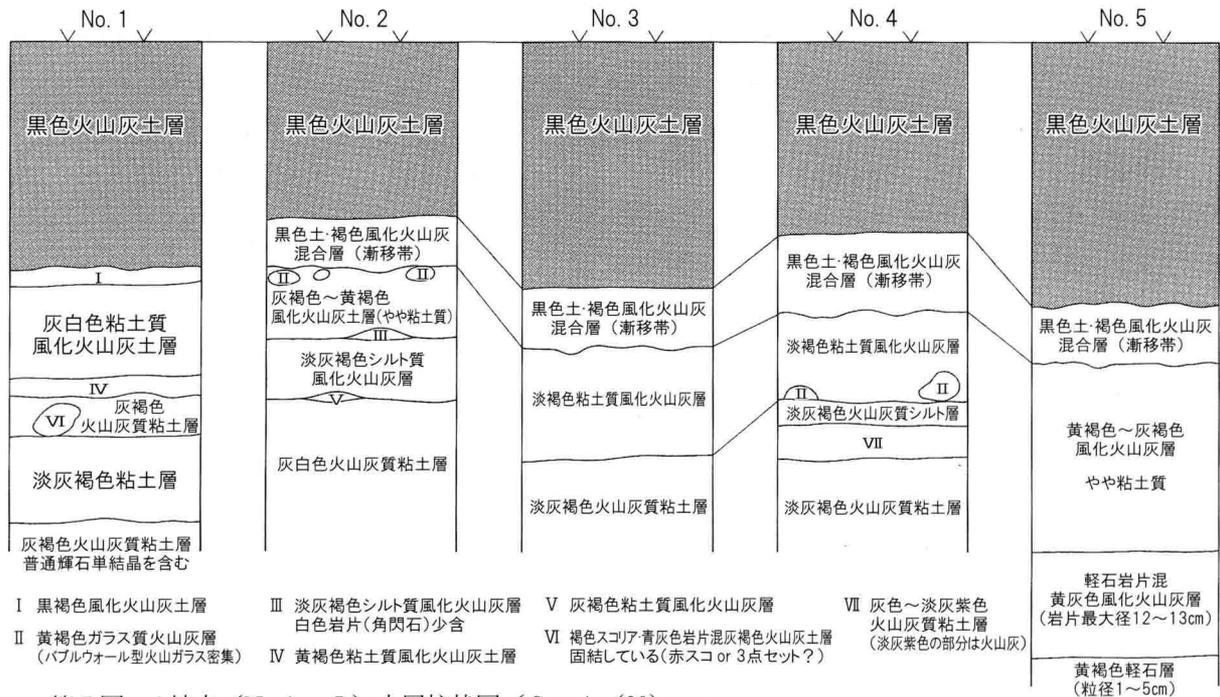
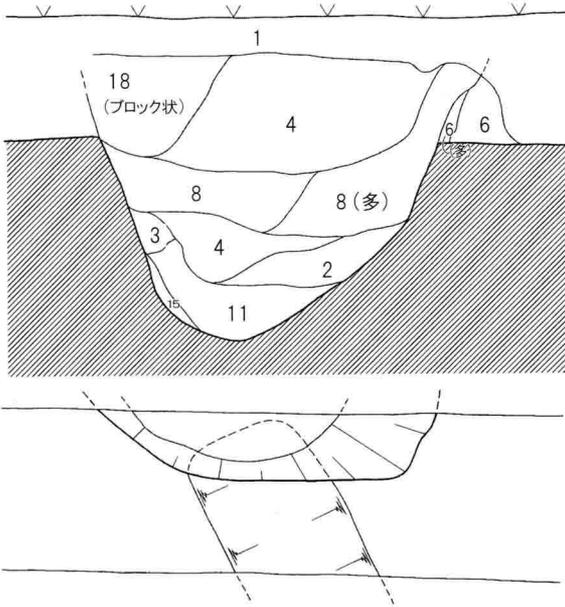


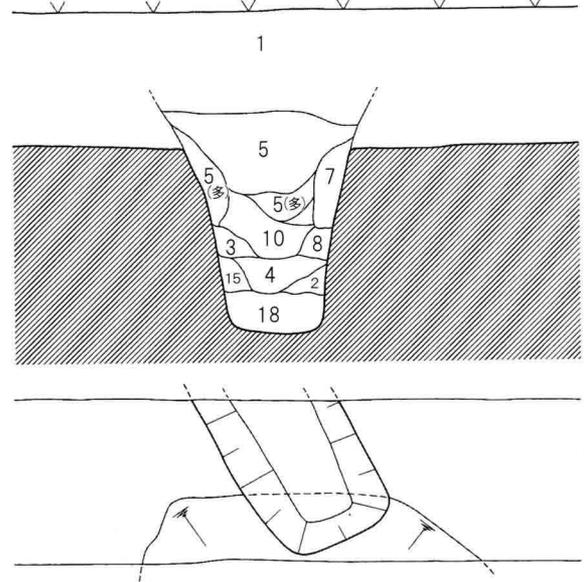
写真 7 土坑 a 完掘



第9図 土坑b実測図 (S=1/40)



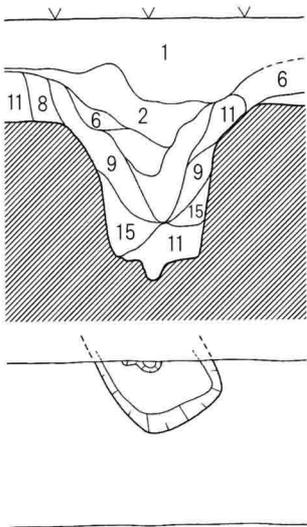
写真8 土坑b完掘



第10図 土坑c実測図 (S=1/40)



写真9 土坑c完掘



第11図 土坑d実測図 (S=1/40)



写真10 土坑d完掘

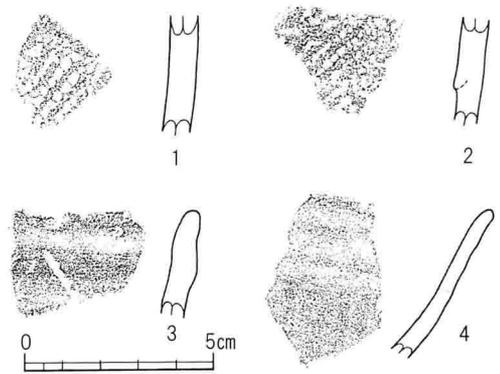
(2) B地点（下箕ヶ谷遺跡）

昭和63年5月30日の1日間で実施した。下箕ヶ谷池の東側のなだらかな西向き斜面で、およそ東西90m、南北230mの範囲に24ヶ所の坪掘りトレンチを任意に設定し掘削した。

トレンチが小規模であったため、遺構の存在については確認していないが、うち4箇所トレンチから5点の遺物の出土があった。出土層位はいずれも表土下30～50cmまでの黒色火山灰土中である。出土遺物の内訳は、北端のトレンチにて縄文時代土器片が2点、中央部北西と南東にて平安時代土器片2点、同じく南東にて石鏃1点である。このほかに、剥片1点も出土している。出土

した石鏃は、先端部と茎部を欠損している凹基有茎の打製石鏃で、風化が著しいもののガラス質安山岩の可能性ある。土器片は、1・2は縄文時代、3・4はそれぞれ甕、杯の口縁部と考えられ、平安時代後半の所産であろう。

A地点が縄文時代の狩猟場としての性格をもつ遺跡であるとの仮定がなりたてば、B地点は狩猟にともなうキャンプ地的な性格をもつ遺跡とも考えられる。



第12図 B地点出土土器実測図 (S=1/2)

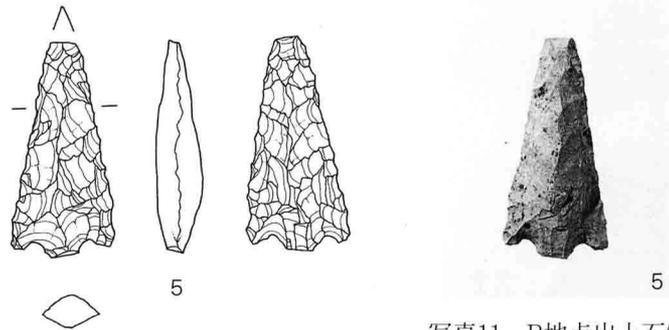
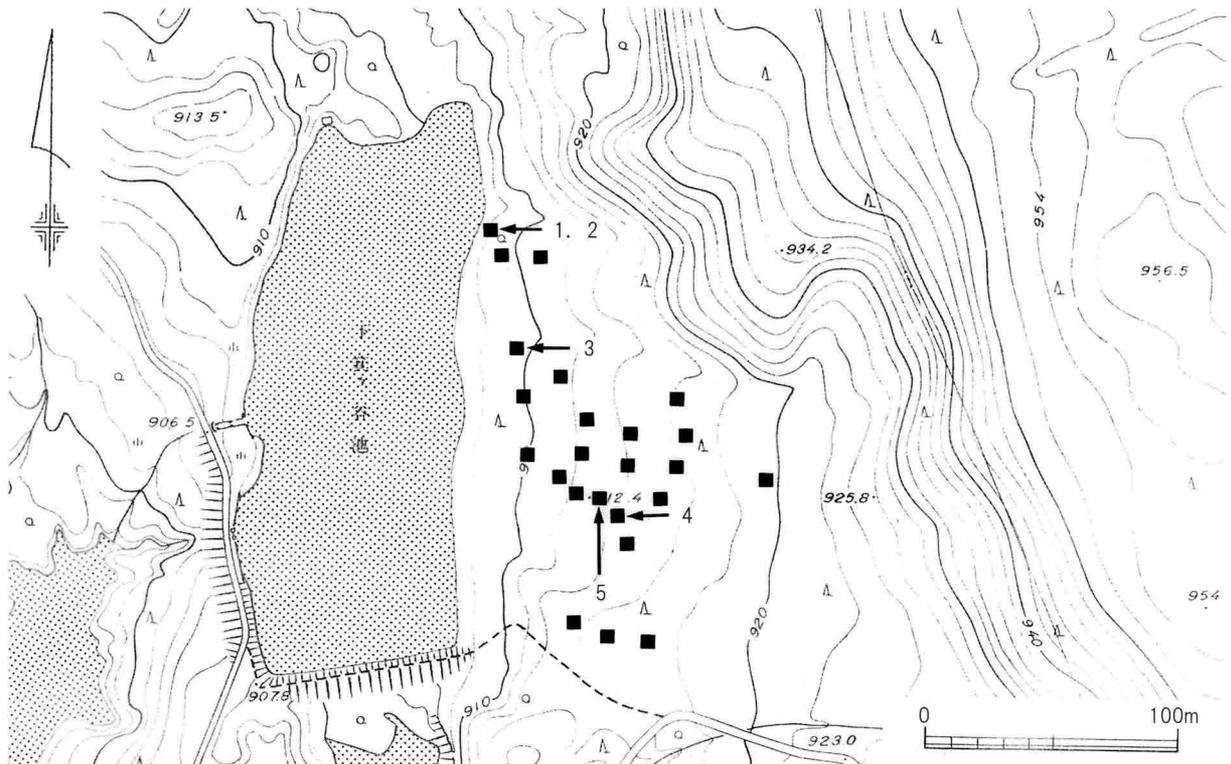


写真11 B地点出土石鏃

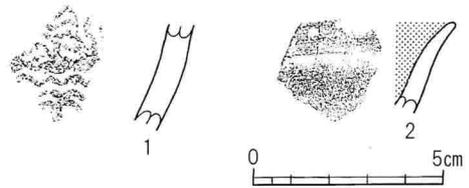
第13図 B地点出土石鏃実測図 (S=1/1)



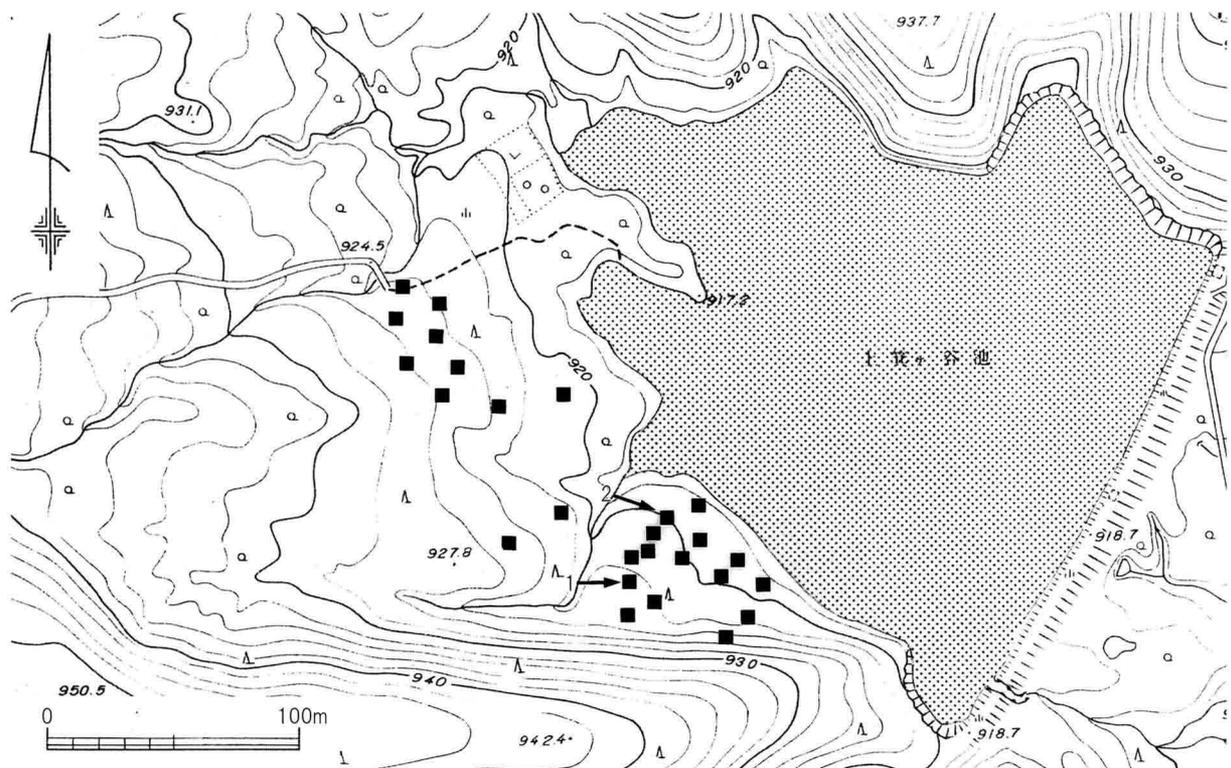
第14図 B地点試掘箇所位置図 (S=1/3,000)  
(図中1～5は、同遺物番号の出土地点である)

### (3) C地点（上箕ヶ谷遺跡）

昭和63年5月31日の1日間で実施した。上箕ヶ谷池南西の北東向きの緩やかな傾斜地で、およそ東西100m、南北140mの範囲に、26ヶ所の坪掘りトレンチを任意に設定し掘削した。B地区同様小規模なトレンチであったため、遺構は確認できていないものの、うち2箇所のトレンチから遺物の出土をみた。出土層位は表土下約30～50cmまでの黒色火山灰土層中である。出土遺物は縄文時代土器片1点と古代の土器片2点である。縄文時代土器(1)は押型文土器と呼ばれる早期のもので、大池周辺に存在する飯綱大池遺跡でも出土が確認されている。古代の土器(2)は内面が内黒処理された杯の口縁部である。小破片であり断定はできないが、その形態から古墳時代後期後半期の可能性が考えられる。また図化できなかったが、杯か短頸壺の口縁部片がある。



第15図 C地点出土土器実測図 (S=1/1)



第16図 C地点試掘箇所位置図 (S=1/3,000)  
(図中1・2は、同遺物番号の出土地点である)

### (4) D・E地点

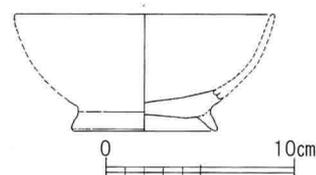
D地点は、開拓道路東側湿地周辺の平坦部と微高地で、飯綱大池遺跡にもっとも近接した場所である。21ヶ所の坪掘りトレンチを設定し掘削したが、埋蔵文化財の包蔵を示す痕跡は確認できなかった。

また地権者の同意が遅れ、平成3年5月8日に実施したE地点は、猫又池の西側かつ大池の北側であり、小屋根上に10ヶ所の坪掘りトレンチを設定・掘削した。基本層序は黒色表土層と褐色ローム層、および漸移層であり、A～C地点に比して黒色火山灰土層の堆積が薄い。うち1ヶ所のトレンチから焼土・炭化物が出土したが、表土層の上部、腐葉土直下から掘り込まれており、近年のファイヤー・ピットと考えられる。その他を含めE地点でも埋蔵文化財包蔵の痕跡は確認されなかった。

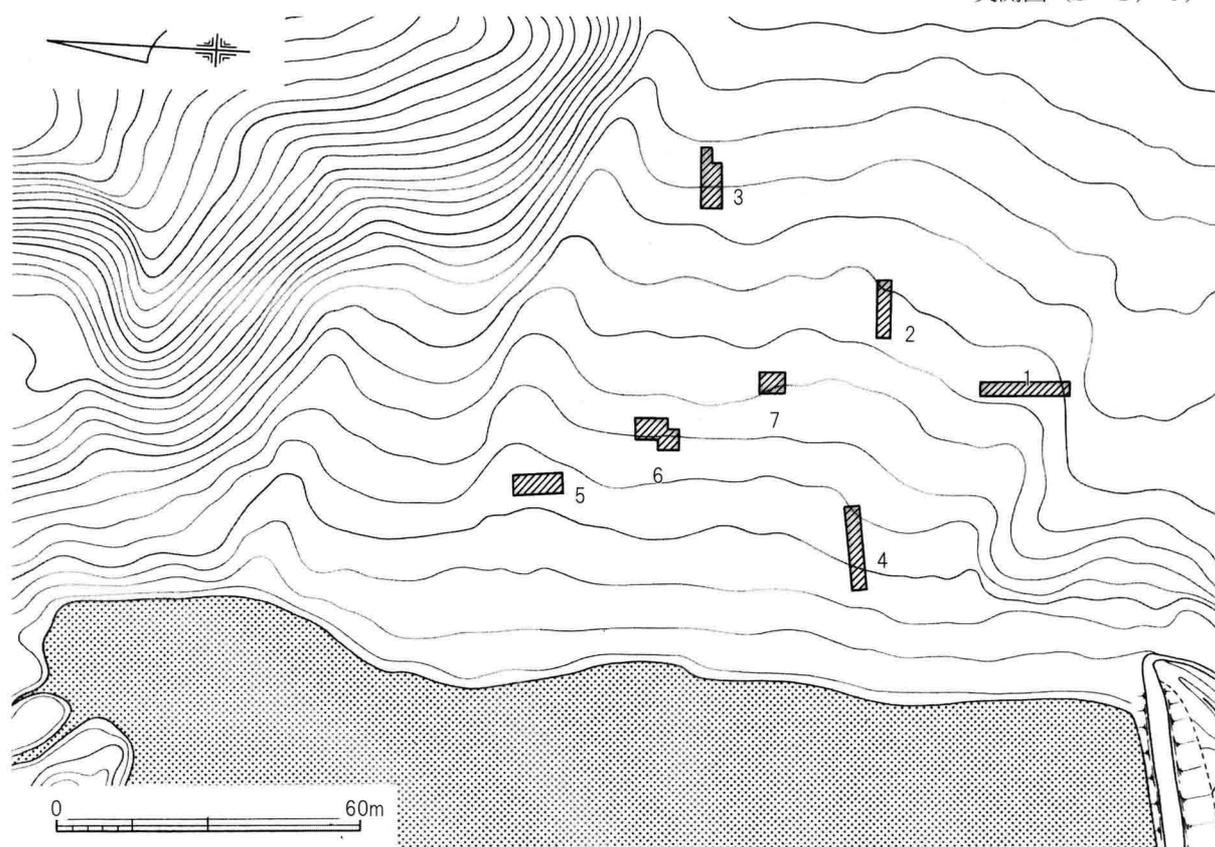
### 第3節 平成7年度の調査

#### 遺構確認詳細分布調査

当該開発事業における埋蔵文化財保護協議は昭和62年度に遡るが、具体的に開発行為にともなう埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条の2第1項）は平成7年3月1日付けであった。これによる県教育委員会からの回答は、昭和63年度および平成3年度の試掘調査の結果から、「発掘調査の実施」であった。委託者は、埋蔵文化財保護措置の対象となるD調整池工事区について、工事工程から平成7年5月17日より伐採をはじめたい意向であった。具体的な発掘調査期間および費用等算出の根拠となるデータの不足により、遺構確認を目的とした詳細分布調査（試掘）を、伐採後の5月26日に実施することになった。試掘調査は、D調整池工事区内の任意の場所に7ヶ所の布掘りトレンチを設定し、小型バックホーにて掘削した。地形図の等高線からもわかるが、工事予定区内には3条の沢筋が認められ、これら沢筋と平坦地との関係も把握することとした。うち第3・6トレンチから遺構・遺物を確認した。第6トレンチからは焼土痕が検出され、平安時代後期後半の土器片が出土している。後の発掘調査においてSB1となる部分であった。第4トレンチで確認した土坑は風倒木痕であった。また下層確認のため、第7トレンチにて地表下約1m40cmまで掘削したが、埋蔵文化財の痕跡は皆無であり、遺構検出面としては黒色火山灰土層と黄褐色ローム層（または漸移層）との境界1面のみであることが確認できた。これらの成果から、遺構の存在が確実な部分2,300㎡と可能性がある部分2,700㎡の計5,000㎡について、遺構検出面1面、遺構密度非常に疎の状態（遺跡係数20%）、時代は縄文時代と平安時代の2時期を確認した。



第17図 第6トレンチ出土土器  
実測図 (S=1/4)

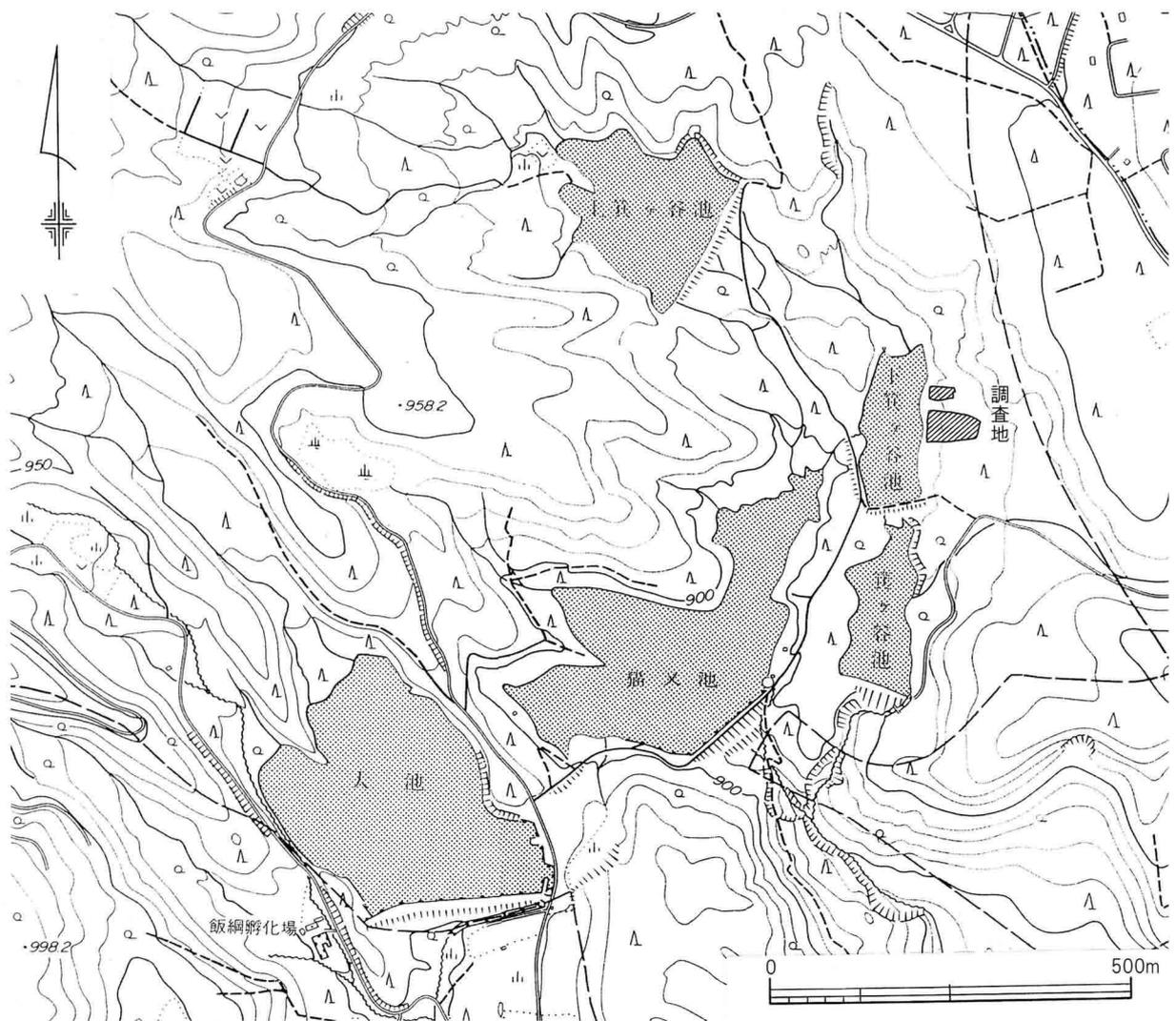


第18図 平成7年度下箕ヶ谷遺跡試掘箇所位置図 (S=1/1,500)

## 第IV章 発掘調査

### 第1節 調査区の位置と概要

調査地は飯綱高原の下箕ヶ谷池東側に位置しており、飯綱山を北西にのぞむ緩やかな西向き斜面である。昭和63年度に実施された起因事業であるゴルフ場建設予定地内分布調査で発見された遺跡であり、開発計画上大規模な掘削となるD調整池を中心に、これまでの試掘調査における遺物の出土地点を勘案して約5,000㎡を調査対象範囲とした。縮尺1/800の地形図〔第20図〕によれば調査予定地内を3条の沢が流れており、調査区は沢筋を挟んだ微高地状の尾根筋に、便宜的に南側よりA・B区に分割して設定した。調査区内からは居住施設跡（SB1・2）、集石遺構（SN1・2）、土坑（SK1）、溝跡（SD1）、柵状柱穴列（SH1）の他に風倒木痕、小穴等を検出したが、いずれも平安時代後半の所産と考えられ、縄文時代については若干の土器片および黒耀石片が採集されたのみで、遺構は確認できなかった。遺構は調査区全体に点的に散在しているが、B区では北側の沢に向かった地山層の落ち込みが確認され、これより谷側での遺構の検出はほとんどみられなかった。この遺跡は遺構の密度や分布状況から勘案しても、集落としての居住区域の一端とは考えにくい。



第19図 下箕ヶ谷遺跡発掘調査地点位置図 (S=1/10,000)



写真12

A区全景（東から）

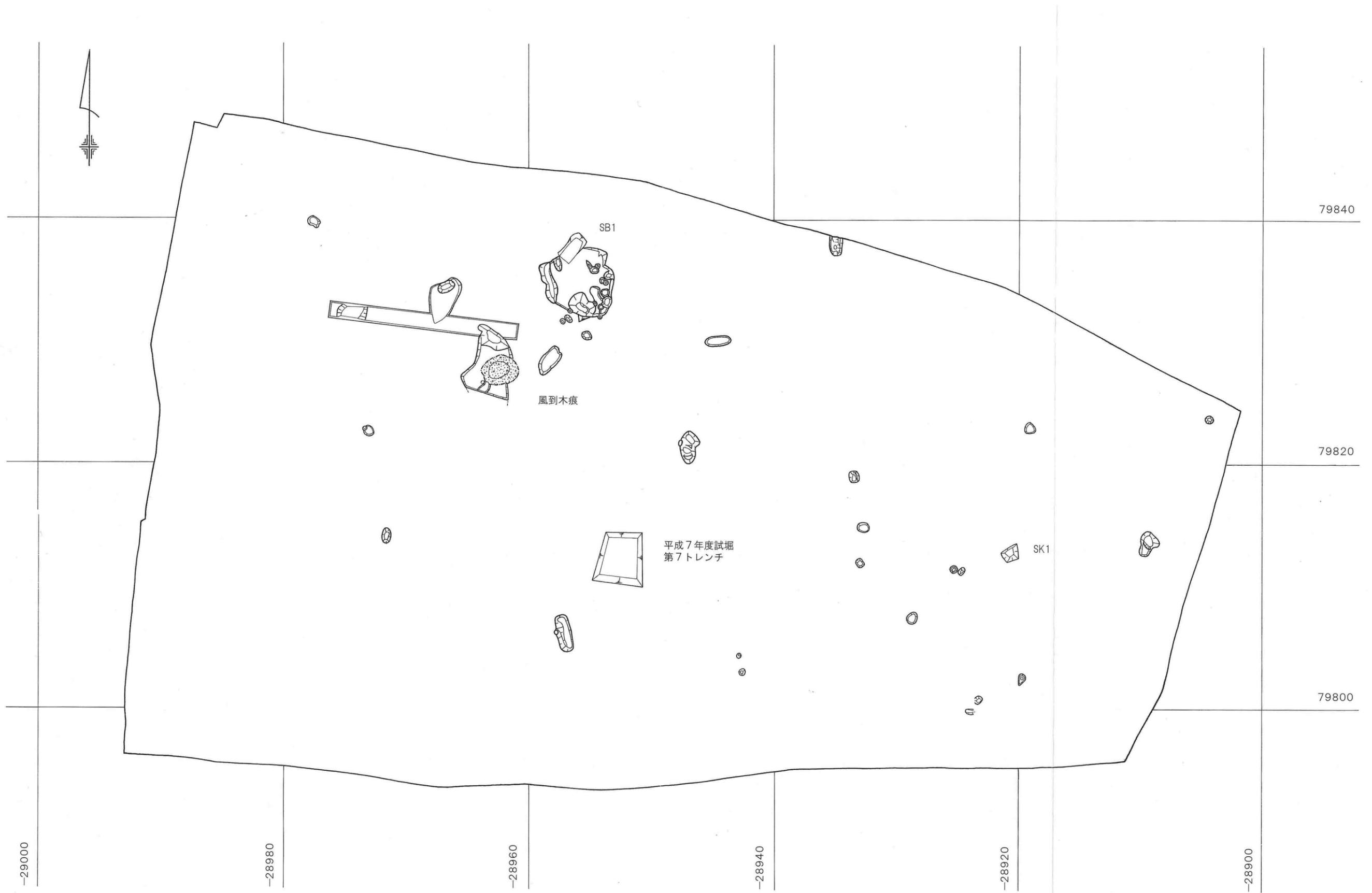


写真13

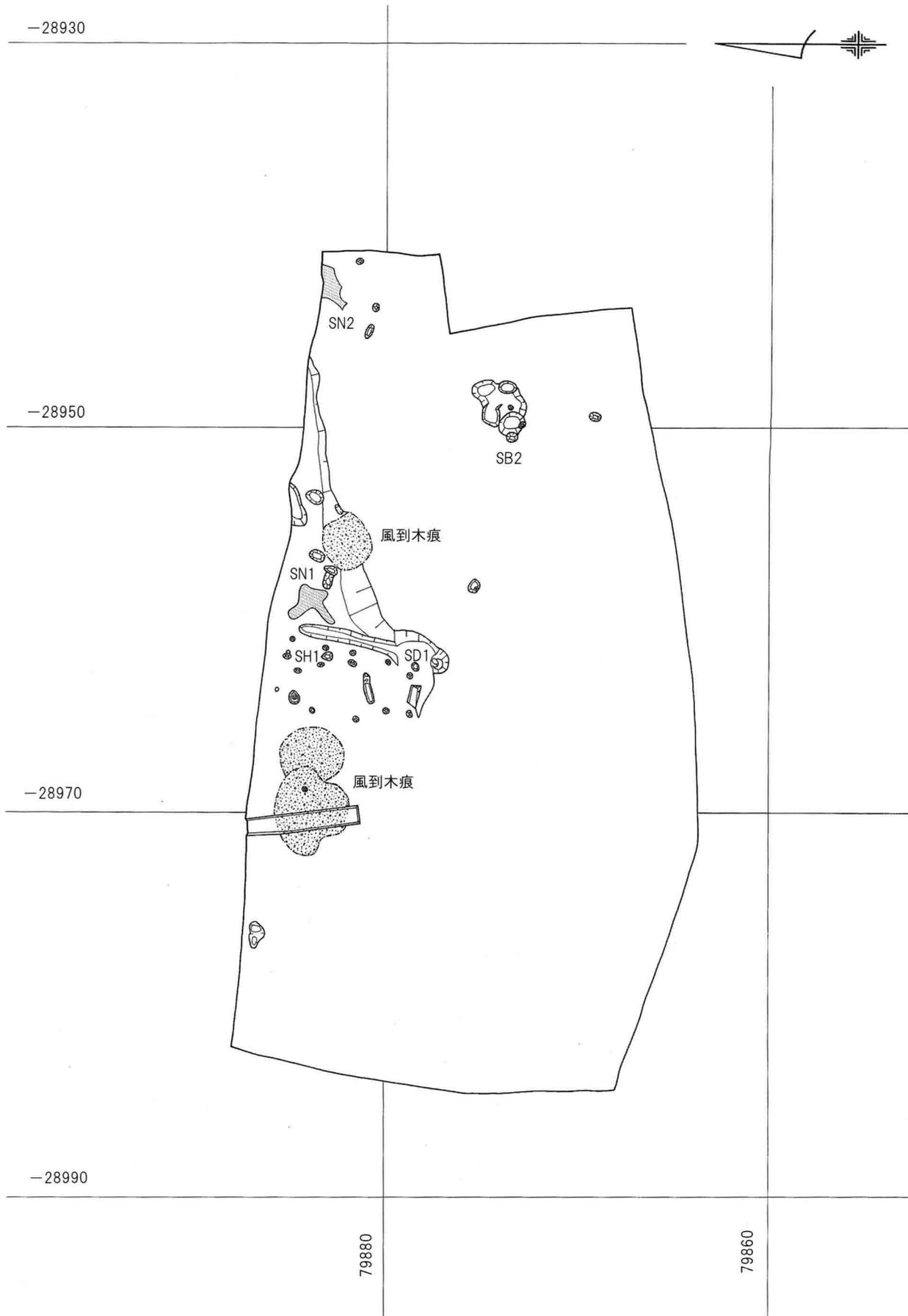
B区全景（東から）



第20図 調査区配置および遺構全体図 (S=1/800)



第21図 A区遺構分布図 (S= 1/300)



第22図 B区遺構分布図 (S= 1 / 300)

## 第2節 調査日誌抄

1995（平成7）年

- 7月10日(月)晴れ 重機による表土剥ぎ作業開始。  
(7月28日まで)
- 7月26日(水)晴れ 器材搬入、プレハブ・仮設トイレ設置。
- 7月27日(木)晴れ 沢を挟んで南側をA区、北側をB区とし、  
B区より人力による遺構検出作業開始。
- 7月28日(金)晴れ B区遺構検出作業。SB2掘下げ作業。
- 7月31日(月)晴れ SB2土器等検出状況写真撮影。SD1掘  
下げ作業。
- 8月1日(火)晴れ SB2精査および完掘写真撮影。
- 8月2日(水)晴れ 現場作業休止。
- 8月3日(木)曇り B区地山層落込み掘削作業（10日まで）。
- 8月4日(金)晴れ 集石遺構（SN1）等検出作業。
- 8月7日(月)晴れ SN1掘下げ作業。
- 8月8日(火)晴れ 風倒木痕の掘削作業。
- 8月9日(水)晴れ 現場作業休止。
- 8月10日(木)曇り 午後、降雨のため現場作業を中止する。
- 8月11日(金)雨天 現場作業中止。
- 8月12日(土)～ 盆期間作業休止（20日まで）。
- 8月21日(月)晴れ A区的人力による遺構検出作業。
- 8月22日(火)晴れ SB1等掘下げ作業。
- 8月23日(水)晴れ SK1等掘下げ作業。
- 8月24日(木)晴れ 風倒木痕ロームマウンド半割作業。
- 8月25日(金)晴れ 風倒木痕等掘下げ作業。
- 8月28日(月)晴れ A区全体及び個別写真撮影。
- 8月29日(火)晴れ A区コーディックシステム（CS）測量。
- 8月30日(水)晴れ A区平面図結線。
- 8月31日(木)晴れ 現場作業休止。
- 9月1日(金)雨天 現場作業中止。
- 9月4日(月)晴れ SN2検出および掘下げ作業。
- 9月5日(火)晴れ SN1平面図及び立面図実測（7日まで）  
B区精査、全体および個別写真撮影。
- 9月6日(水)晴れ B区コーディックシステム（CS）測量。  
器材撤収作業。
- 9月7日(木)晴れ B区平面図結線。本日をもって現場におけ  
るすべての作業を終了する。



写真14 B区重機表土剥ぎ作業



写真15 B区遺構検出作業



写真16 B区SD1掘下げ作業

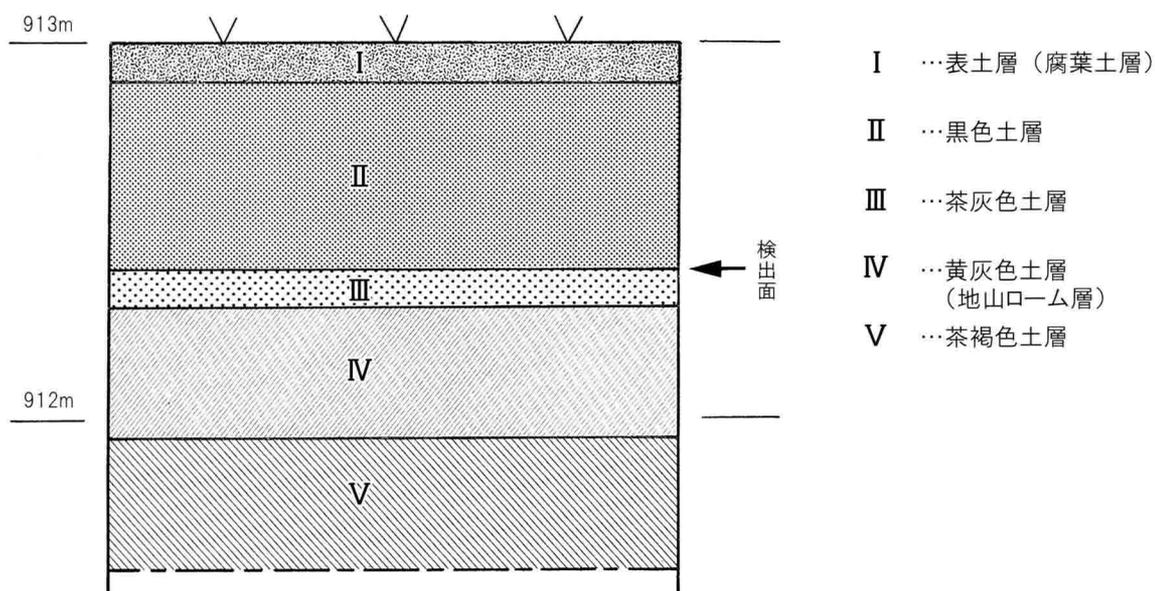


写真17 B区SN1実測作業

### 第3節 基本層序

下箕ヶ谷遺跡の層位は、基本的に単純な水平堆積を示しており、地山ローム層までは大きくⅠ～Ⅳ層に分層される。調査地が谷地形にむかった微高地状の尾根筋に位置していることから、層位も谷へ向かって緩やかに傾斜している。第Ⅱ層の黒色火山灰土層は遺物包含層であり、堆積の厚い部分で50cmを測る。第Ⅲ層の茶灰色土層は第Ⅱ層から第Ⅲ層への漸移層で、トレンチによっては検出されないところがあり、調査地内とその周辺において部分的に堆積しているものと考えられる。また第Ⅳ層の黄灰色風化火山灰土層（ローム層）の上に薄く堆積しており、第Ⅲ層が存在する箇所においてはこれが検出面となる。土層柱状図〔第23図〕に示す第Ⅴ層は、平成7年度に実施した試掘調査の第7トレンチにおいて地表下約1.40mまで掘削したところ確認された土層であり、湧水位にあたると思われる。第Ⅳ層以下の遺物の混入は皆無で、ローム層中の埋蔵文化財（旧石器時代）は存在しないものと考えられる。調査地が沢筋に挟まれた微高地上に立地していることは地形図からも看取されたが、このことはB区においてローム層の落ち込みが確認されたことでも証明できよう。

したがって遺構検出面の設定は、第Ⅱ層と第Ⅲ・Ⅳ層の境界1面のみであると考えられる。



第23図 第7トレンチ土層柱状図 (S=1/20)



写真18 第7トレンチ土層堆積状況



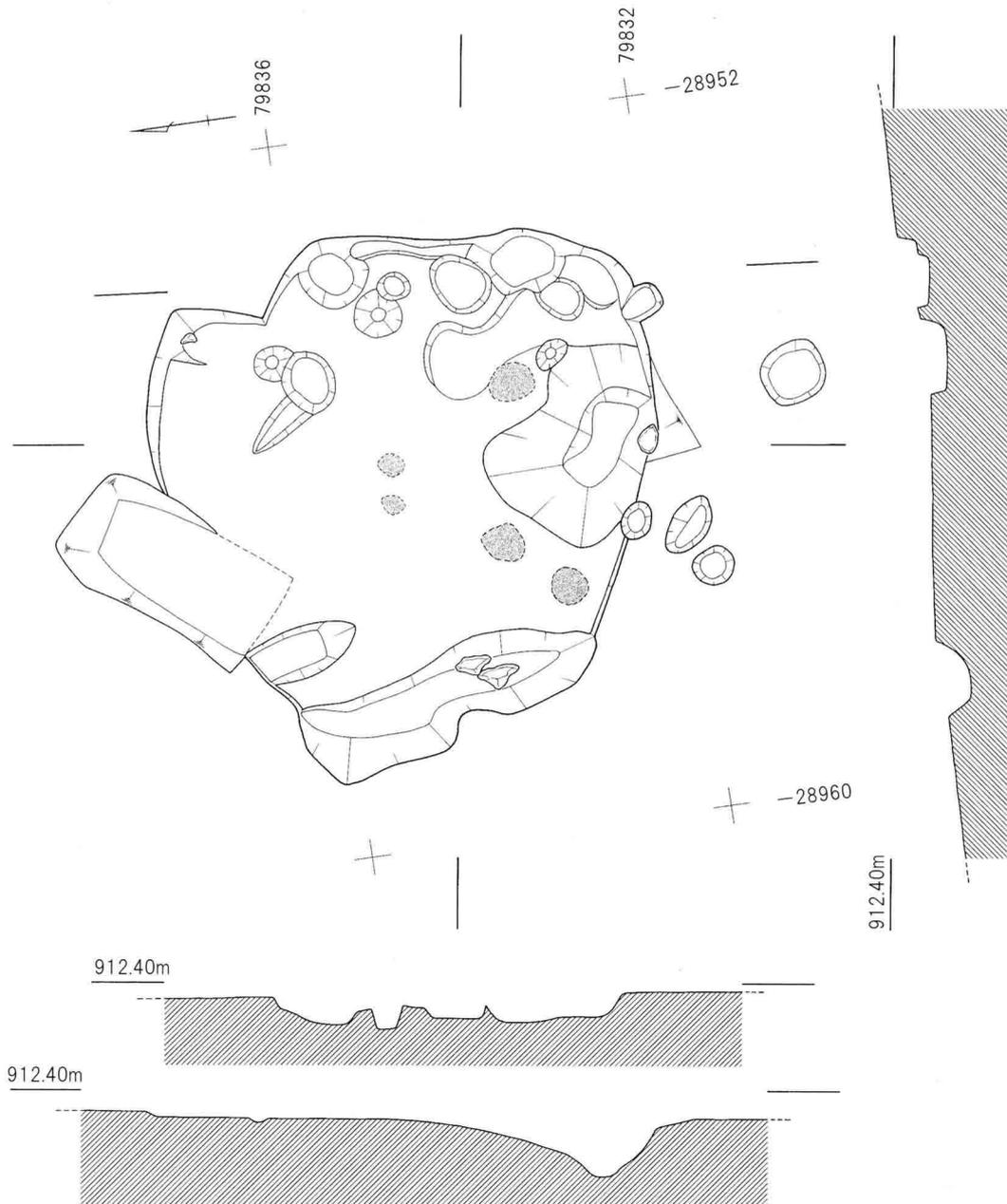
写真19 A区西北隅北壁土層

## 第4節 遺構と遺物

### (1) 居住施設跡 (SB1・2)

#### SB1 (A区)

平成7年に実施した試掘調査の第6トレンチ [16頁、第18図] で検出した焼土痕部分に該当する遺構である。一部を攪乱により破壊されているが、最大幅5.60mを測る不整な方形を呈する居住施設と思われる遺構であり、斜面山側は竪穴住居跡状に掘り込んで構築されているが、谷側は地山のまま利用しており、いわゆる平地で検出される竪穴住居跡とは形態が異なる。検出面からの床面の深さは北東隅で16cmを測り、地形の傾斜に応じて数値を減ずる。床面からは中央付近を中心に5基の焼土痕が検出されたが、いずれも被熱面の硬化はみられず、炉跡と断定することはできなかった。また遺構の谷側端で検出された溝状を呈する土坑はこの居住施設跡の出入口施



第24図 A区SB1実測図 (S=1/80)

設に相当するものと考えられるが、山側で検出された重複する土坑・小穴等は切り合いが不明確なものが多く、それぞれの用途・性格なども不明である。

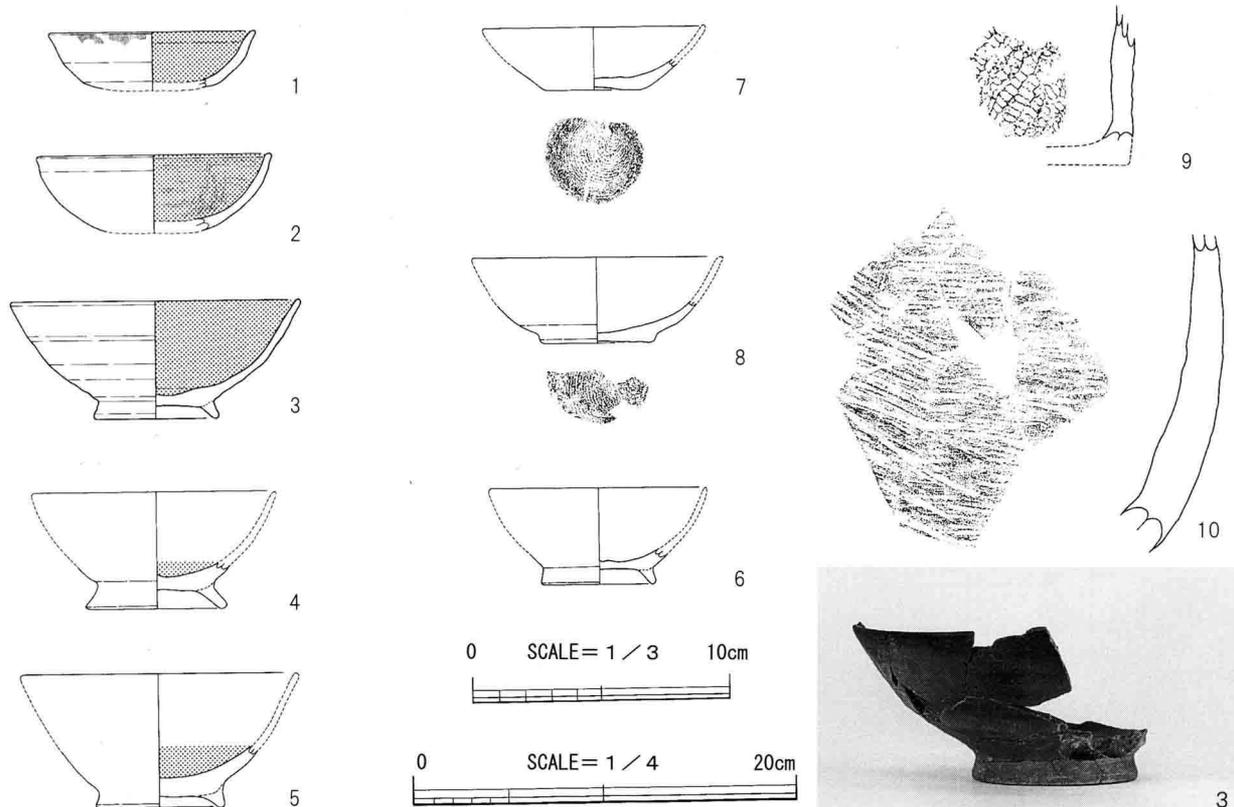
出土土器〔第25図〕には土師器杯（1・2・7・8）、椀（3～6）、甕（10）の他に、混入と思われる縄文土器の深鉢底部（9）があるが、いずれも破片出土で完形品はない。杯類はロクロ成形されたのち底部を回転糸切りによって切り離しており、7・8の底部には糸切り痕が明瞭に残存している。椀類は糸切りののち、三ヶ月形高台が後付けされている。1～5の内面は黒色処理がされており、2・5および6は内面底部から口縁部にかけて放射暗文状のヘラミガキが施されている。また1の口縁外面にはタール状のものが付着しており、灯明皿として使用された可能性が示唆される。その他、試掘調査において検出された焼土痕周辺から多量の甕・羽釜等の破片が出土しているが、図化上復元可能なものはなかった。



写真20 A区SB1（北から）



写真21 A区SB1（西から）

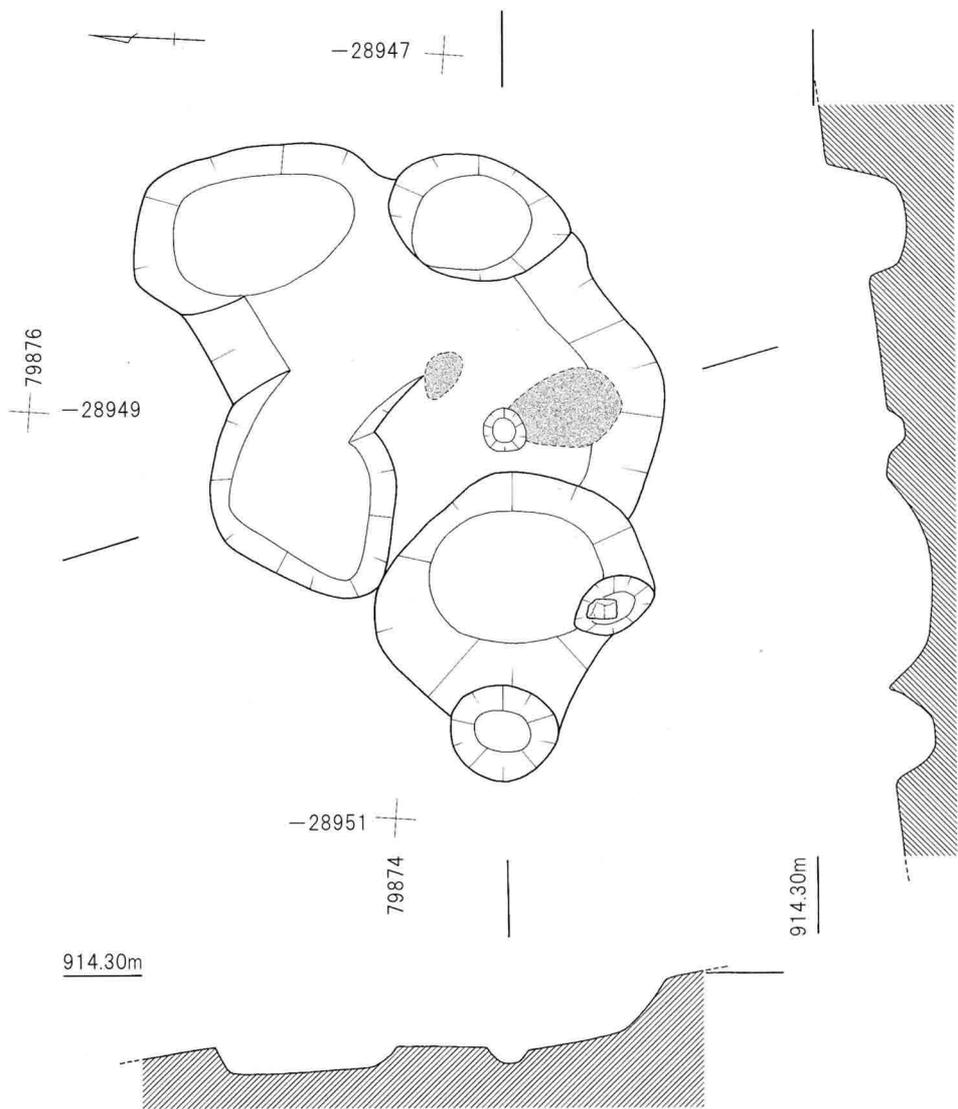


第25図 SB1遺物実測図（S=1/4、9・10は1/3）

写真22 SB1出土土器

**S B 2 (B区)**

B区の東端中央付近で検出された遺構であり、連続する数基の土坑群によって構成されたイメージを呈する。当初これを居住施設遺構と認識することには抵抗あったが、出土する土器片がS B 1と同様、羽釜や碗類が主体であり、住居というよりはキャンプサイトに近い「掘っ立て小屋」的なものとして居住施設遺構とした。この居住施設遺構のプランについては、もとは斜面を山側に掘り込んで構築されたS B 1に近似していたものと推察され、おそらく遺構廃棄後に、掘り込みの浅かった遺構の北西半分は流水等による侵食を受けて消滅し、山側に残った土坑群のみ検出された可能性



第26図 B区S B 2 実測図 (S= 1 / 40)



写真23 B区S B 2 (北から)



写真24 B区S B 2 遺物検出状況

が考えられる。土坑からは土器片のほか、焼土・炭化物・被熱石材が出土し、火を焚いた痕跡が残っていた。

出土土器〔第27図〕には土師器杯（1～4）、椀（5～12）、甕（13～26）の他に、図化することはできなかったが羽釜がある。杯・椀類の殆どは底部のみの破片出土であったが、4・5・7の底部内面は黒色処理され、丁寧なヘラミガキが施されている。また11の底部内面には8本単位の放射暗文状のヘラミガキが観察された。13～17の甕は小型の部類に属し、



写真25 B区S B 2 遺物検出近景

ロクロで成形されている。16の内・外面はハケ調整されており、内面には指頭圧痕がみられる。口縁部は成形時に歪みを受けているが、その歪み方から、注口部としての用途を兼ねて故意に歪まされた可能性も捨てきれない。17は回転糸切りによって切り離れた底部の端を、胴部にむかってなで付けるように丸みをもたせて成形している。なお14・15は胎土から同一個体と考えられる。大型甕（18～26）は外面をタタキ調整されており、同一個体の破片と思われるが、復元には至らなかった。

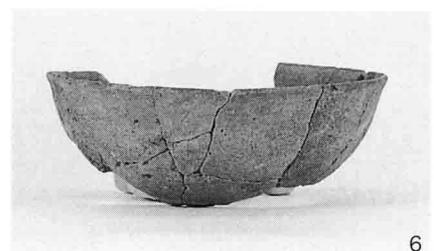
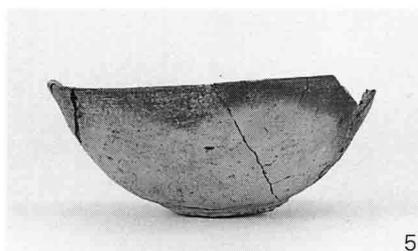
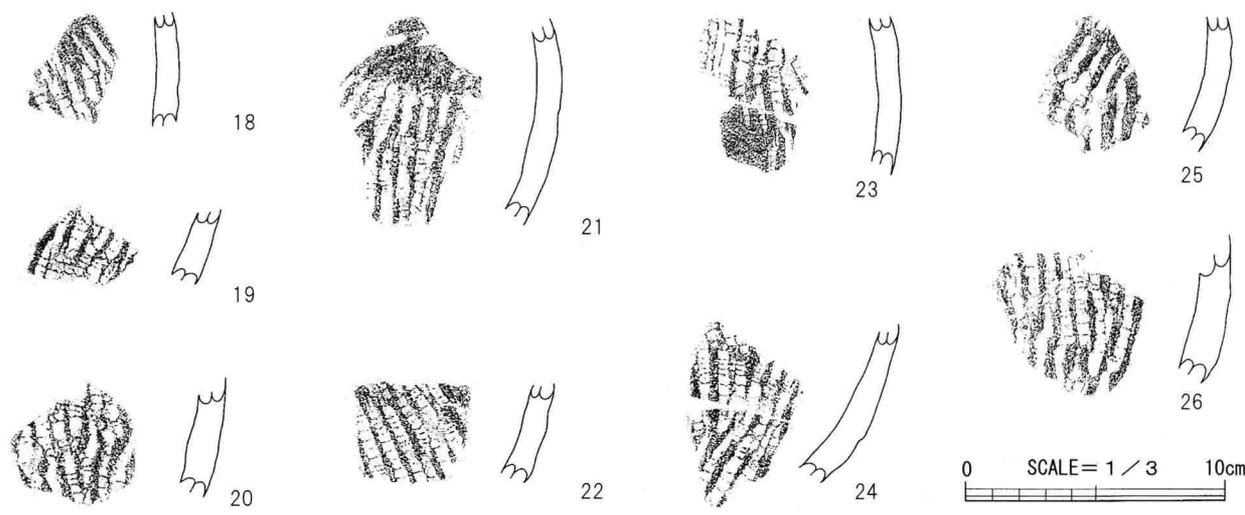
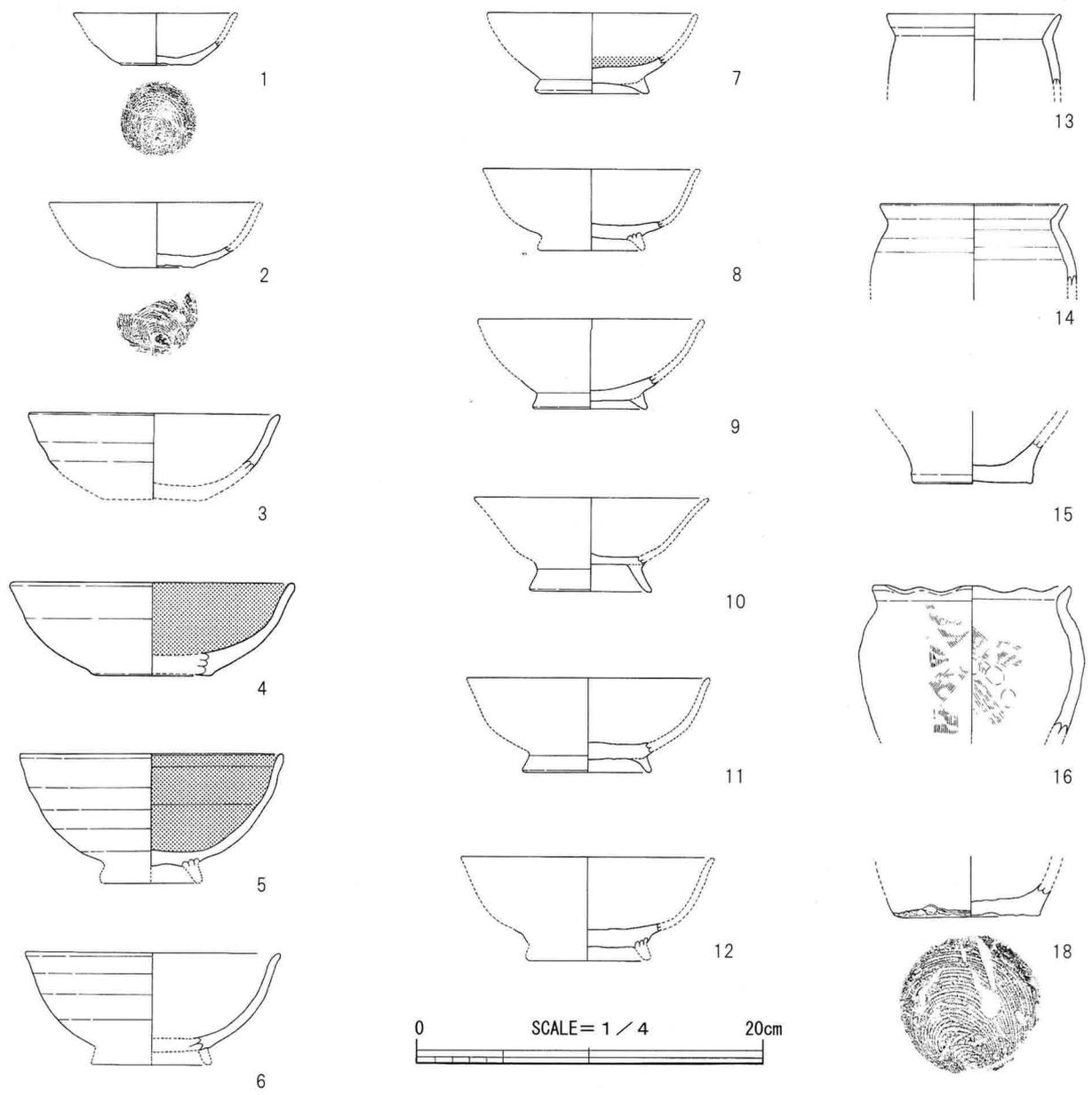


写真26 S B 2 出土土器



第27図 S B 2 遺物実測図 (S=1/4、18~26はS=1/3)

(2) 集石遺構 (SN1・2)

SN1 (B区)

B区の北半部で検出された地山層落ち込みの斜面下方に位置する集石遺構である。石材には、調査地周辺である下箕ヶ谷池東岸に分布する裾花凝灰岩層にあたとみられる礫岩、砂岩〔6頁、第2図参照〕を使用しており、人頭大～拳大の礫を落ち込み斜面の傾斜に並行して、長方形に囲んだように配している。この配石内の覆土の土層堆積状況を調べたところ、包含層である黒色火山灰土層〔25頁、第23図参照〕が流れ込むように堆積していただけで、集石にともなう掘り方等は確認されなかった。

この集石遺構は、落ち込み斜面上の浅い凹地を利用して構築されたものと考えられる。出土遺物もないため性格は不明であるが、沢に向かった傾斜地に立地していることや、SD1の先端部に接していることなどから、水辺に関する祭祀的な意味合いを持った遺構である可能性も捨てきれない。



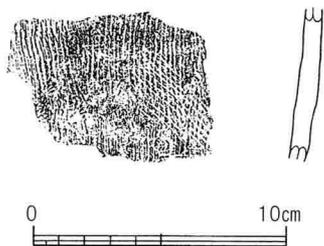
第28図 B区SN1実測図 (S = 1/20)



写真27 SN1 (北から)

### SN2 (B区)

B区北側の地山層落ち込み傾斜面で検出されたSN1より15m東に位置する、B区の北東隅で検出された。集石の中心部分は調査区外となっていると思われるが、断面図 [第30図] から、SN1と同様に北に向かったの落ち込み斜面にかかって傾斜していることが看取される。集石の中心部には人頭大以上の比較的大きな石と拳程度の小さな礫が密集している。集石の南側には人頭大以上の石が散在しており、また3基の小穴が検出された。この小穴の性格は、集石のそれも含めて不明である。集石の中心部から甕の体部と思われる破片が1点出土しているが、古墳時代後期のハケ甕の可能性も考えられる土器片である。



第29図 SN2出土土器  
実測図 (S=1/3)



写真28 SN2中心部 (北から)



第30図 SN 2 実測図 (S = 1/40)



写真29 SN 2 (東から)



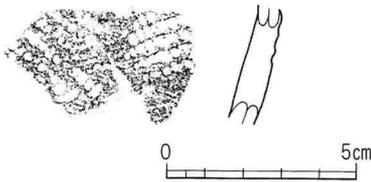
写真30 SN 2 (北から)

### (3) 土坑

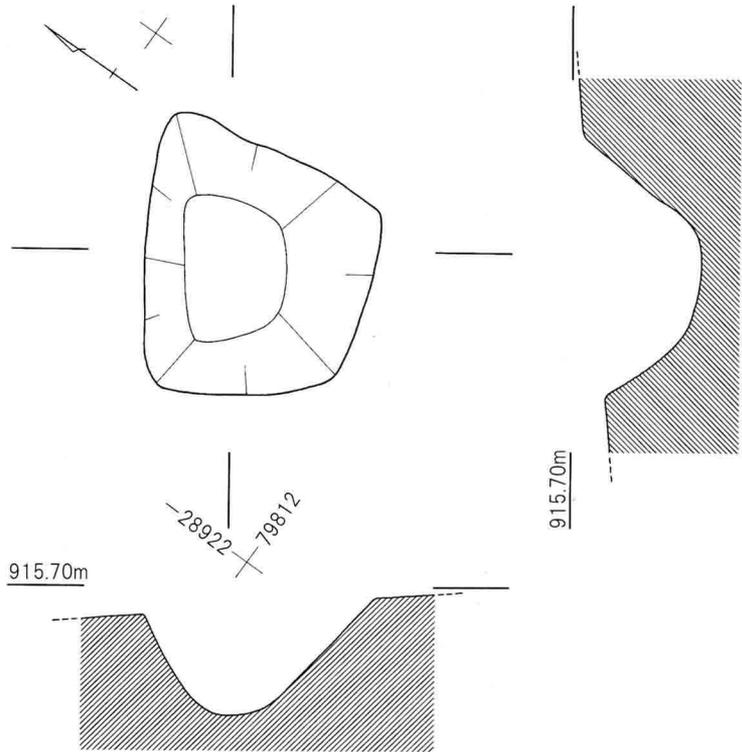
16基が検出された。長方形、円形、方形等があるが、陥し穴のような深い掘り込みのものはなく、浅いものばかりである。いずれの土坑も調査区内に散在した単独遺構であり、遺物の出土もほとんどなく、詳細は不明である。ただSB1に近接した土坑の上面からは焼土痕が検出され、SB1との関連性が示唆された。

#### SK1 (A区)

A区の中央東寄りに位置しており、検出された土坑のなかで唯一土器片が出土した。北隅が突出しているが、一辺1.24mの台形を呈する土坑である。検出面からの深さは56cmを測り、椀底状の断面を呈するが、斜面谷側に比べて山側の掘り込みは浅い。覆土中より縄文土器の破片が1点のみ出土しているが、覆土中層でもあり、時期決定の根拠としては希薄である。



第31図 SK1出土土器実測図 (S=1/2)



第32図 A区SK1実測図 (S=1/40)



写真31 SK1完掘

(4) 溝跡・柵状柱穴列

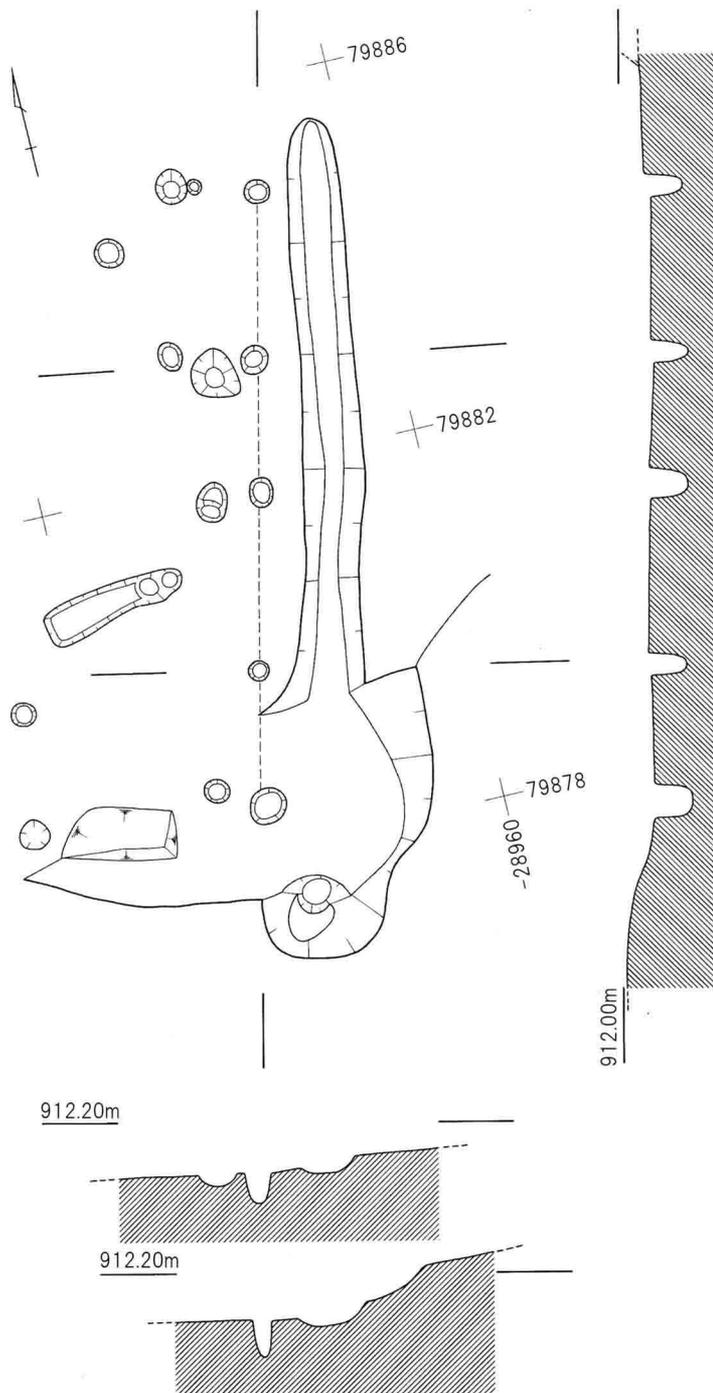
SD1・SH1 (B区)

B区の中央から北へ延びる、東西に並列する遺構である。SD1は、B区で検出された地山層落ち込みの谷側端部に接する溝跡と考えられる遺構であり、落ち込み斜面の最下部を浅く掘り込んで樋状にし、南端に構築された土坑状部分に向かった傾斜を持っている。土坑状部分は検出面から最深53cmを測り、このことから、斜面からの流水を溝で受け、土坑状部分に流し込んだ可能性が示唆される。SH1は、SD1の西側に位置する柵状に配された5基の柱穴列であり、おそらくSD1に付属したものと考えられる。

出土土器には、SD1の覆土中より土師器の高台付杯1点〔第34図〕が出土している。大部分を欠損しているが、SB1・2と同時期の所産と考えられる。



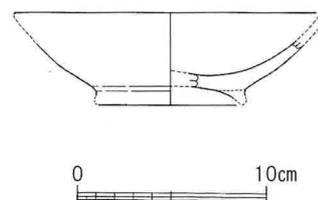
写真32 SD1・SH1 (北から)



第33図 SD1・SH1実測図 (S=1/40)



写真33 SD1・SH1 (西から)



第34図 SD1出土土器  
実測図 (S=1/4)

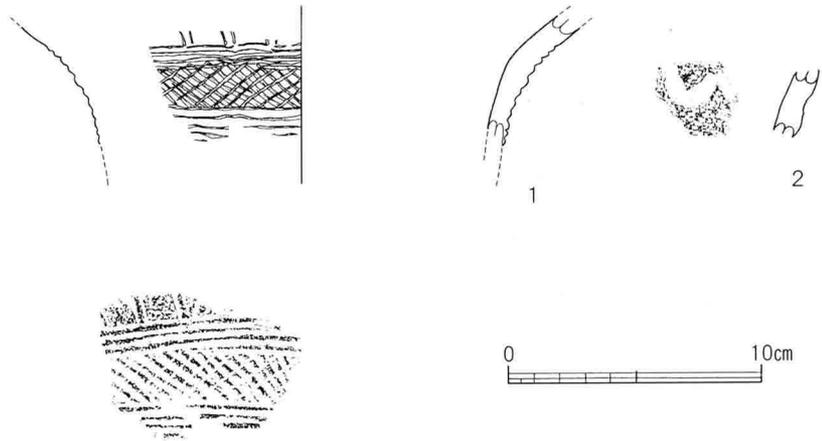
(5) その他の遺構と遺物

A・B両区とも検出面精査時の出土遺物は少ない。出土しても磨耗の著しい土器片か、石器剥片・碎片類である。おそらく縄文時代と平安時代に所属する遺物であろう。A区から沈線文系の土器片〔第35図、1〕が出土した。文様構成は、半截竹管状の工具による沈線文を幾何学的に組合せた、梨久保式土器に近似している。梨久保式は約5000年前の縄文時代中期初頭に比定される土器群で、長野県内の八ヶ岳西麓や諏訪湖盆地を中心に、上伊那・松本平には比較的多く見られるのに対し、長野市を含む北信地方ではこの時期の土器がほとんど知られていない。昭和63年度試掘調査C地点にて出土した縄文時代早期の押型文土器とあわせ、縄文時代の遺構が存在する可能性は低いとはいえないだろう。

A・B両調査区とも、風倒木痕が多く確認された。いわゆるロームマウンドと呼ばれるもので、黒色火山灰土が嵌入している。遺物包含層である黒色火山灰土中の磨耗した土器細片が出土する例もあったが、風倒の時期特定は不明である。なお、遺構分布図にはすべての風倒木痕の位置を測量することができなかった。



写真34 A区出土縄文土器 (S ≒ 1 / 2)



第35図 A区出土縄文土器実測図・拓影 (S = 1 / 3)

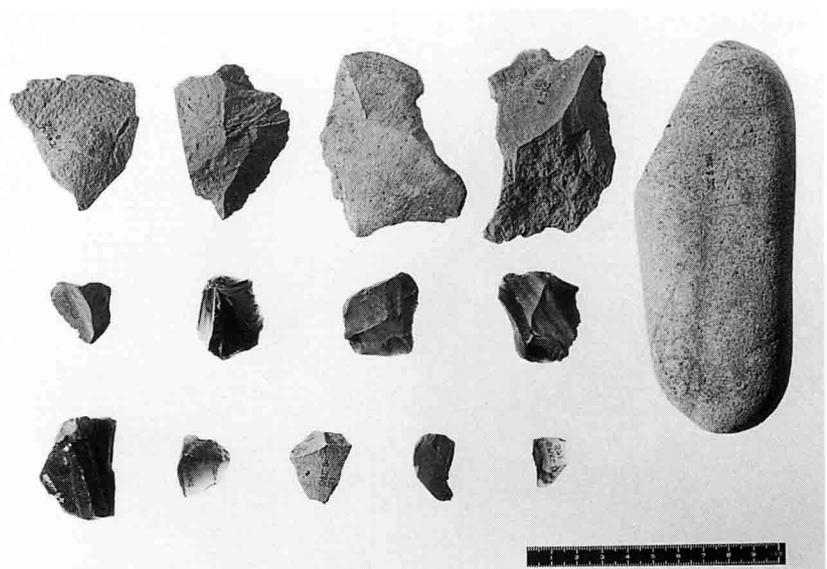


写真35 下箕ヶ谷遺跡出土石器 (S ≒ 1 / 3)

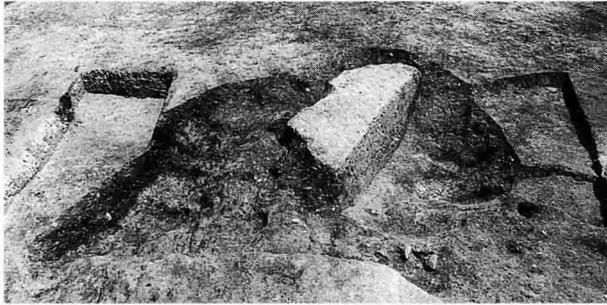


写真36 風倒木痕半割状況

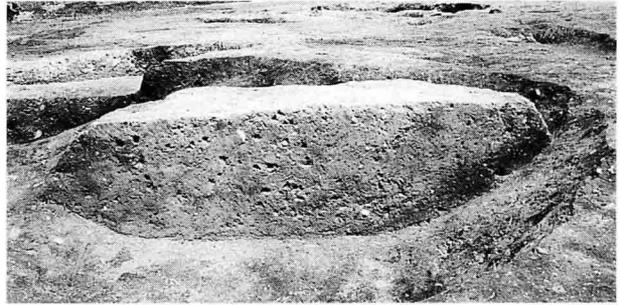


写真37 風倒木痕土層断面



写真38 B区東半遺構全景



写真39 A区遠景

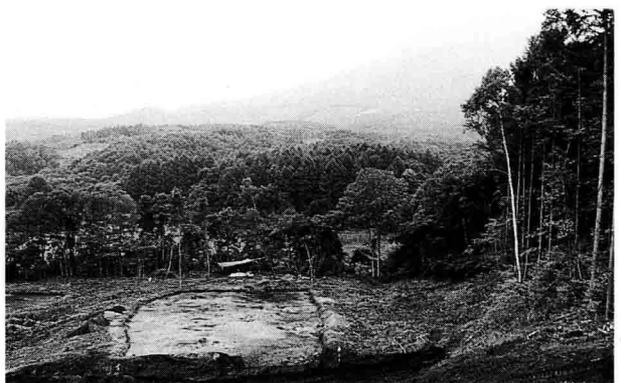


写真40 B区遠景

## 第V章 結 語

起因事業である開発予定地は、長野市北部の飯綱高原に位置し、長野市と牟礼村にまたがっている。発掘調査現場へは毎日片道1時間をかけ牟礼村を經由して通い、現地での作業時間も通勤時間を考慮して短縮して実施した。発掘調査期間がお盆前後であり、長野盆地平地部に比して冷涼だった点は好条件であったが、遺構検出時に鎌で削ってしまい何とも言えぬ思いをさせる多量のセミの幼虫や、ヤブ蚊をはじめ名も知らぬ虫たちの波状攻撃、ヘビの集団徘徊など、高原ならではの苦労もあった。

試掘調査A地点のさかさやち遺跡で確認された長方形土坑群は、縄文時代早期に多い遺構とされ、イノシシなどの狩猟に用いられた落とし穴と考えられている。土坑dは底部に小穴が穿たれており、その可能性が高い。試掘調査では10基を確認するにとどまったが、各地での調査成果を参照すれば数十基の土坑が群集している例が多く認められることから、周辺に多くの土坑が存在することも容易に推測できる。また、さかさやち遺跡が狩猟場としての性格をもつ遺跡だとすれば、試掘調査B地点および発掘調査地である下箕ヶ谷遺跡は、狩猟に関連する人々の居住施設の存在する遺跡とも考えられる。縄文時代の居住施設は未確認であるが、縄文時代の土器片の出土はひとつの可能性を示唆している。

発掘調査の成果としては、遺構の性格を明確にできなかったことが悔やまれる。SB1・2とした遺構は、ともに焼土痕が残り、平安時代後半の食膳具をもっていた。何らかの居住施設を想定したが、肝心の遺構が不明瞭で、上屋構造の復元は困難である。確認数、密度、地下構造などから便宜的に「季節的簡易居住施設」の名称を与えたにすぎず、積極的な根拠はない。SN1・2の集石遺構はさらに性格不明である。むしろ人工的な遺構かどうか疑わしい。平行する溝状遺構と小穴列も、それが何であるのかわからない。いずれの遺構も今後類例の増加を待って改めて検討すべき課題と考える。

本調査の特徴は、広大な開発面積をくまなく実地踏査し、遺物散布地および地形的に埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられる地点を試掘調査し、その多くを現状保存できたことである。これは委託者である京浜急行株式会社の深いご理解とご協力の賜であり、それに要した設計変更等の負担は決して小さくない。埋蔵文化財保護に対する多大なご尽力に感謝申し上げる次第である。

上ヶ屋遺跡の後期旧石器時代後半の礫群・ブロック、さかさやち遺跡の土坑群と上箕ヶ谷遺跡の押型文土器（縄文時代早期？）、下箕ヶ谷遺跡の沈線文系土器（縄文時代中期初頭？）、同じく平安時代後半の遺構（居住施設？）、飯綱高原における埋蔵文化財包蔵状況の把握にむけての材料は依然乏しい。しかしながら本調査成果がその礎のひとつになれば、昇天したセミの幼虫たちも浮かばれるものと思う。



写真41 飯綱山頂からみた下箕ヶ谷遺跡

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しもみのがやいせき							
書名	下箕ヶ谷遺跡							
副書名	長野京急カントリークラブ建設事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第83集							
編著者名	小野由美子・飯島 哲也							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL026-284-0004 FAX026-284-0106							
発行年月日	1997（平成9）年3月31日							
印刷所	奥山印刷工業株式会社							
ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 度 分 秒	東経 度 分 秒	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもみのがや 下箕ヶ谷 遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 おおあぎきたごう 大字北郷 2016-6番地 他	20201	A-048	36度 43分 09秒	138度 10分 33秒	19950710 ～ 19950907	4,730㎡	ゴルフ場 造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下箕ヶ谷 遺跡	散布地	平安時代 後半	居住施設遺構 2基 溝+棚状柱穴列 1基 土坑・小穴	土師器		季節的簡易 居住施設か？		
		時期不明	集石遺構 2基 土坑 1基 風倒木痕 など	土師器、縄文土器、 石器 等				
さかさやち 遺跡	散布地	縄文時代	土坑群（落とし穴？） 10基	なし		試掘A地点		
上箕ヶ谷 遺跡	散布地	縄文時代、 古墳後期？	なし	縄文土器(押型文)、 土師器		試掘C地点		

## 長野市の埋蔵文化財

- |       |                                       |       |  |
|-------|---------------------------------------|-------|--|
| 1968年 | 第1集『信濃長原古墳群』                          | 1992年 | 第44集『塩崎遺跡群(7)』                           |
| 1976年 | 第2集『浅川西条』                             |       | 第45集『石川条里遺跡(6)』                          |
| 1978年 | 第3集『中村遺跡』                             |       | 第46集『篠ノ井遺跡群(4)』                          |
|       | 第4集『塩崎遺跡群』                            |       | 第47集『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』(2分冊) |
| 1979年 | 第5集『塩崎遺跡群(2)』                         |       | 第48集『小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅱ』                      |
| 1980年 | 第6集『三輪遺跡 一付水内坐一元神社遺跡』                 | 1993年 | 第49集『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(4)』                   |
|       | 第7集『田中沖遺跡』                            |       | 第50集『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』                    |
|       | 第8集『篠ノ井遺跡群』                           |       | 第51集『松原遺跡Ⅱ』                              |
|       | 第9集『四ツ屋遺跡 (第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』      |       | 第52集『田牧居掃遺跡』                             |
| 1981年 | 第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』             |       | 第53集『岩崎遺跡』                               |
|       | 第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』                |       | 第54集『古町遺跡 流人塚』                           |
| 1982年 | 第12集『浅川扇状地遺跡群 一牟礼バイパスA・E地点』           |       | 第55集『浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅱ』                   |
| 1983年 | 第13集『浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』   |       | 第56集『上見林遺跡』                              |
| 1984年 | 第14集『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』                |       | 第57集『石川条里遺跡(7)』                          |
|       | 第15集『箱清水遺跡(2)』                        |       | 第58集『松原遺跡Ⅲ』                              |
| 1985年 | 第16集『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』             | 1994年 | 第59集『史跡 松代藩主真田家墓所』                       |
| 1986年 | 第17集『浅川扇状地遺跡群 一牟礼バイパスB・C・D地点』         |       | 第60集『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』                         |
|       | 第18集『塩崎遺跡群Ⅳ 市道松節一小田井神社地点遺跡』           |       | 第61集『栗田城跡』                               |
| 1987年 | 第19集『土口将軍塚古墳 一重要遺跡確認緊急調査一』            |       | 第62集『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)・小島柳原遺跡群 上中島遺跡』     |
|       | 第20集『三輪遺跡(2)』                         |       | 第63集『松原遺跡Ⅳ』                              |
|       | 第21集『芹田小学校遺跡』                         |       | 第64集『小島柳原遺跡群 宮西遺跡』                       |
|       | 第22集『長野吉田高校グランド遺跡』                    |       | 第65集『浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパスB地点遺跡(2)』            |
| 1988年 | 第23集『横田遺跡群 富士宮遺跡』                     |       | 第66集『石川条里遺跡(8)』                          |
|       | 第24集『塩崎遺跡群Ⅴ 殿屋敷遺跡』                    | 1995年 | 第67集『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』                   |
|       | 第25集『小島柳原遺跡群 南川向遺跡』                   |       | 第68集『栗田城跡(3)』                            |
|       | 第26集『東番場遺跡』                           |       | 第69集『浅川扇状地遺跡群 徳間本堂原遺跡』                   |
|       | 第27集『小柴見城跡』                           |       | 第70集『八幡田沖遺跡』                             |
|       | 第28集『宮崎遺跡』                            |       | 第71集『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡』           |
|       | 第29集『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』                  |       | 第72集『塩崎遺跡群(8)・石川条里遺跡(9)』                 |
|       | 第30集『地附山古墳群』                          |       | 第73集『松代城跡』                               |
|       | 第31集『町川田遺跡』                           |       | 第74集『松代城跡Ⅱ』                              |
| 1989年 | 第32集『中条遺跡』                            | 1996年 | 第75集『浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡(6)・棗河原遺跡』     |
|       | 第33集『鶴前遺跡』                            |       | 第76集『浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡・小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅲ』        |
|       | 第34集『石川条里遺跡(4)』                       |       | 第77集『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡』                    |
|       | 第35集『篠ノ井遺跡群Ⅱ』                         |       | 第78集『布施塚1号古墳・2号古墳』                       |
| 1990年 | 第36集『屋地遺跡Ⅱ』                           | 1997年 | 第79集『柏尾南遺跡』                              |
|       | 第37集『篠ノ井遺跡群Ⅲ』                         |       | 第80集『小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡Ⅱ』                |
| 1991年 | 第38集『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』              |       | 第81集『裾花川扇状地遺跡群 若宮南遺跡』                    |
|       | 第39集『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』              |       | 第82集『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡Ⅱ』                   |
|       | 第40集『松原遺跡』                            |       | 第83集『下箕ヶ谷遺跡』                             |
|       | 第41集『小島柳原遺跡群 中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群 押鐘遺跡・檀田遺跡』 |       |  |
| 1992年 | 第42集『田中沖遺跡Ⅱ』                          |       |  |
|       | 第43集『南宮遺跡』                            |       |  |

長野市の埋蔵文化財第83集

### 下箕ヶ谷遺跡

平成9年3月24日 印刷

平成9年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会  
 発行 長野市埋蔵文化財センター  
 印刷 奥山印刷工業株式会社